

掲示板:第一章 神についての研究

- [キリスト教教理入門:序文](#) [3] [1999年 7月29日 21時56分36秒]
- [第一節 教理の学びとしての神学](#) [7] [1999年 7月29日 22時 9分20秒]
- [第二節 教理の学びの必要性](#) [5] [1999年 7月29日 22時15分20秒]
- [第三節 科学としての神学](#) [6] [1999年 7月29日 22時22分56秒]
- [第四節 キリスト教教理の研究の出発点](#) [6] [1999年 7月29日 22時30分30秒]
- [第二項目 神学の方法:序](#) [1] [1999年 7月29日 22時32分30秒]
- [第一節 聖書の材料の収集](#) [4] [1999年 7月29日 22時37分36秒]
- [第二節 聖書の材料の整理](#) [2] [1999年 7月29日 22時41分14秒]
- [第三節 聖書の教えの意味の分析](#) [2] [1999年 7月29日 22時45分10秒]
- [第四節 歴史的取り扱いの吟味](#) [2] [1999年 7月29日 22時48分11秒]
- [第五節 教理の本質のみきわめ](#) [1] [1999年 7月30日 13時20分28秒]
- [第六節 聖書以外の資料からの光](#) [4] [1999年 8月10日 13時27分53秒]
- [第七節 教理の今日的表現](#) [5] [1999年 8月17日 12時 8分12秒]
- [第八節 解釈における中心的な主題の深化](#) [2] [1999年 8月20日 8時 8分12秒]
- [第九節 主題における層形成](#) [2] [1999年 8月23日 12時33分39秒]

記事タイトル:キリスト教教理入門:序文

「序文」by Millard J. Erickson
第一段落翻訳

さて数年間、私の書籍「キリスト教神学」はそれが意図された目的によく用いられた。つまり、組織神学における神学校レベルの入門的教科書として。教師と学生の双方から広範囲な受容と肯定的な反応は満足させるものであった。

解説 by Aguro

M.J.エリクソンの「キリスト教神学」は、共立基督教研究所での三年間の内地留学のときに、恩師のひとりであります宇田進師より部分的に学んだものです。宇田師の著作集や資料集、論稿に目を通していくうちに、いくつかの資料の源泉のかなりの部分が M.J.エリクソンからのものであることも分かってきました。つまり宇田師の福音理解の包括性に魅せられていた私は、そこからさらに M.J.エリクソンにひきつけられていきました。K B Iでの組織神学講義の準備もあり、ここ1, 2年は M.J.エリクソン著作集の研究に没頭している私です。この研究は欧米のキリスト教界の中で M.J.エリクソンが及ぼしている影響、きわだった貢献を、第一義的には私の所属する J E C と K B I の流れの中に還元するものでありますとともに、日本のキリスト教会全体へのひとつの貢献としてもたらされていくものと確信しています。

[1999年7月29日 21時54分27秒]

「序文」 by Millard J. Erickson
第二段落翻訳

加えて、キリスト教大学や聖書大学におけるたくさんの教育者が、キリスト教教理を概観する科目において教科書として「キリスト教神学」を使用してきた。彼らのうちのいくらかの人たちは、より専門的な部分のいくつかを削除したこの書籍のより簡潔な改訂版に対する期待を表明してきた。それらは私に、このタイプの著作物から利益を得る一団の学生たちの存在を確信させることとなった。ここに現在ある書籍が備えられたのは、これらの必要にかなうようになるためであった。

解説 by Aguro

M.J.エリクソンの「キリスト教教理入門」は、エリクソンの「キリスト教神学」の簡潔版です。この「キリスト教教理入門」の書籍紹介には「神学は決して難解であったり、抽象的であったりするべきではない。というのは『キリスト教教理は、クリスチャンが持っている最も基本的な信仰を簡単に陳述することである。』のだから。」と記されています。以下そのあたりをいくつか紹介しましょう。

「今多くの大学では、エリクソンの説明が簡潔明瞭であるので、組織神学のクラスのために『キリスト教神学』を使用しています。しかし大学の講義には『キリスト教神学』よりももっと簡潔なものが必要であると知って、L.アーノルド・ファスタッドはそれを70%にまで削り落としました。哲学と聖書批評の章は取り除かれました。啓示、救い、神の人格に関する深みのある章は、要約されました。」

「エリクソンのふたつの著作は、理想的な連続性を提供しています。学生は大学において『キリスト教教理入門』を、神学校においては『キリスト教神学』を使用することができます。」

「『キリスト教教理入門』はまだ福音をコンテクスチュアルすることに関して『キリスト教神学』から際立った章を描きだしています。エリクソンは、神学とは何であるかについての説明をもってはじめています。そして啓示、神についての教理、創造と摂理、人間、罪、イエス・キリスト、聖霊、贖いと救い、教会、終末論へと進んでいきます。」

「福音主義研究所における長年にわたる教授、ミラード・J・エリクソンは、ノースウエスタン大学からPh.Dを授与されました。そしてミュンヘン大学において博士号取得後の研究をしました。彼は『新福音主義神学』『終末論における今日的選択』『救済論』などを著述しました。」

「以前エリクソンの学生でありましたL・アーノルド・ファスタッドは、クラウン大学（旧聖パウロ聖書大学、セント・ボニフェイス、ミネソタ）において神学と哲学の教授です。」

M.J.エリクソンの著作集の今日の日本の宣教、教会形成、神学教育における価値を認めるひとりとして、「この著作集に流れるものを宣教と教会形成と神学教育の現場になんとかしてでもたらしたい。」これがICIの設立目的です。私のライフ・ワークの主要な部分です。ICIから流れるものを通して日本における主の働きが一步でも前進することを祈りつつ。

[1999年7月29日 21時55分35秒]

「序文」by Millard.J.Erickson
第三段落翻訳

「キリスト教教理入門」は、「キリスト教神学」への下準備そして橋渡しをするために企画されている。それは（キリスト教教理入門）そのより大きな書籍（キリスト教神学）とスタイルと概観において同一である。多くの文章はそれ（キリスト教神学）から変えられることなく抜粋されている。ここ（キリスト教教理入門）で起こってくるいくつかの論争点のより拡大された議論とかここ（キリスト教教理入門）で話されていないいくつかの論争点の取り扱いを望む学生や他の人々は、そのより大きな書籍（キリスト教神学）を参考にするようにすすめられる。

解説 by Aguro

M.J.エリクソンの「キリスト教教理入門」と「キリスト教神学」の関係についての記述です。日本の神学校では、まず「キリスト教教理入門」をきっちりと学んでから、その上で上級レベルの内容の「キリスト教神学」を学ぶというのが良いと思われます。「キリスト教教理入門」でさえ、学ぶのにかなりの時間数が必要とされています。KBI（関西聖書学院）での私の講義の場合、授業を効果的にすすめるために、翻訳に近いレジюме・プリントを作成し配布しています。講義では輪郭とエッセンスを教え、かなりのスピードで進んでいます。授業時間が足りません。それで二年間で扱えない章を自学自習で学んでもらうために、毎回の講義を録音しています。ホームページの「空間を越えたクラス・ルーム」に掲載しています講義レジюмеをみながら、講義録音テープを聞かれますと、みなさんの家庭における自学自習もきっと実りあるものになると思います。1.聖書的適格性、2.正統的公同性、3.現代的適応性、4.自己革新性、といった特質を宿す世界的スタンダードの組織神学をあなたの家庭で学ぶことができます。講義録音テープはホームページの「郵便箱」の中の「組織神学」をクリックしていただきますと、「注文コーナー」がでてきますので必要な方は気軽に注文してください。

[1999年7月29日 21時56分36秒]

記事タイトル: 第一節 教理の学びとしての神学

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson
Part 1. The Doing of Theology
第一章 神についての学び: 第一項目 神学の性質
第一節 教理の学びとしての神学
第一段落翻訳

いくにんかの読者には、"教理"ということばは何か空恐ろしいものであるかのように思われているかもしれない。それは大変専門的で難しく抽象的な、多分教義的に提示されている信条のイメージを呼び起こすものである。しかしながら教理は、そのようなものではない。キリスト教の教理は、クリスチャンが持っているもっとも基本的な信仰、すなわち神の性質、神のみわざ、神の創造物である私たち、神との関係の中へと私たちを連れ来るものについての信仰の単純な陳述である。無味乾燥であったり、抽象的であったりするものとは違って、それらは真理についての最も重要な形式なのである。それらは生の基本的問題についての陳述でもある。すなわち、私は誰なのか。宇宙の究極的な意味は何なのか。そして私は何処へ行こうとしているのか。そのようなとき、キリスト教教理は、すべての人が尋ねるそれらの問いに与え解答である。

解説 by Aguro

キリスト教の教理は「クリスチャンが持っているもっとも基本的な信仰の単純な陳述である。それらは生の基本的問題についての陳述でもある。」とのエリクソンの定義は単純明解である。「もっとも基本的な信仰の単純な陳述」という理解が、エリクソンの組織神学の全体を貫いていて、その内容の分かりやすさになっている。「生の基本的問題」とは、信仰のコンテクスチュアルな側面を指摘している。これはエリクソンの扱う神学の射程が説教壇にまでのばされていることを語っている。

=====
[1999年7月29日 21時58分30秒]

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson
Part 1. The Doing of Theology
第一章 神についての学び: 第一項目 神学の性質
第一節 教理の学びとしての神学
第二段落翻訳

教理は、神と実在の他の部分についての普遍的なあるいは永遠の真理を取り扱う。それは、特別な歴史的出来事、つまり神がなされたことについての学び

のみではなく、歴史の中でみわざをなされるまさに神御自身の性質についての学びである。教理の学びは神学として知られている。文字通り、神学は神についての学びである。それは注意深い、組織的な研究・分析であり、キリスト教教理についての陳述である。その特徴のいくつかを知ることは、私たちが神学的な務めを理解する上で助けとなるであろう。

解説 by Aguro

エリクソンは、続く段落において「神学の特徴」を1.聖書性、2.組織性、3.文化への脈絡性、4.今日性、5.実際性、の五つの項目において扱っています。そのひとつひとつを明日から学んでまいりましょう。

=====

[1999年7月29日 22時1分19秒]

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson

Part 1. The Doing of Theology

第一章 神についての学び：第一項目 神学の性質

第一節 教理の学びとしての神学

第三段落翻訳

1. 神学は聖書的なものである。それは旧新約聖書から第一の内容が取られる。付加的な洞察が、神の創造の学びから、つまりときどき神のみわざの書物として言及されているものによって得られるかもしれない。しかし第一義的に神学の内容を構成するものは、神のことばである。

解説 by Aguro

「第一義的に...神のことば」これがエリクソンの神学についての確信であり、第一義的な源泉です。これはまたエリクソンの説教についての確信でもあります。今日の多くの説教が体験や証しの内容になっています（参考文献：「ブラウン管の神々」）。

J. R. W. ストットは、ローザンヌ世界伝道会議の講演において、「現代は、方法とか、成果とか、実存ということが強調され優先する時代である。しかし、第一世紀の宣教においてもっとも中心的なことは、使信（メッセージ）そのものであった。」と語って注目されました。

「説教において、聖書のみことばを語る。」基本中の基本ですが、なかなか難しいことでもあります。みことばを語るのではありますが、非常に表面的な扱いしかできず、会衆の霊的食欲を満たすことができないと苦闘しているというのが現実ではないでしょうか。

ローザンヌ会議のテーマのひとつは、「驚くべき伝道のエネルギー」の立証という点であります。そしてもうひとつは「それぞれの国のさまざまな文化の中で、教会は聖書のメッセージをどのように解釈し、どのように提示し、どのようにそれに従い、かつ生きようとしているのか。」という宣教上の中心問題を新しい自覚をもって掘り下げる端緒を提供しました。

実はこれが、最近宣教論の中心的テーマのひとつとなってきた「コンテクスチュアリゼーション」、つまり福音を私たちの生のコンテクストや私たちの文化的・社会的・歴史的状況に正しく翻訳し、真の意味で福音を受肉させるという課題なのです（参考文献：「ポスト・ローザンヌ：序文」）。

2000年前のみことばを、この21世紀に向かおうとする時代の会衆に豊

かに分かち合おうとしますときに、ひとつの聖書の個所からメッセージしますときに、その個所の主題を”平面的”に解釈するのみでなく、組織神学的に”立体的”に解釈していくことが大切です。そうした一生涯にわたる努力の積み重ねが、つどう会衆をして「なるほど、この聖書の個所のこの主題には、このように深い意味があるのか。今日は礼拝に来て本当に良かった。」と言わしめるほどになれるのです。

私はエリクソンの「キリスト教教理入門」には、知的な情報としての学びのみでなく、以上のような「説教壇」へのチャレンジが満ちていると確信しているのです。これが私が「キリスト教教理入門」の講義を”説教準備学”と呼ぶ理由でもあります。一段落ごとの中から、数多くの「教理的説教」のヒントが与えられていきます。ある学生は、私の電子メール講義をプリントアウトして、バインダー・ノートにファイルしています。そのファイルに感じたこと、思ったこと、新聞やテレビの最近の関連情報、教会のメンバーや求道者の最近の様子、とりなしの祈りや必要のメモなどをいろいろと書き込んでいきますと、実に見事な”説教準備ノート”が出来上がっていきます。メイン・ディッシュであります”みことばから発した教理”がきちんとしていますから、総菜（おかず）が生きてくるのです。このようなノートづくりを常日頃からやっておけば、説教づくりが楽しいものとなっていきます。「次は一体どのような料理（説教）でもてなそうかな。」と。

そうそう、私は最近「料理の本」を買いました。「説教とは、みことばを材料にした料理だ。」という確信のもとに、その本の「料理の秘訣」から「説教づくりの秘訣」を学んでいるのです。

=====
[1999年7月29日 22時3分8秒]

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson
Part 1. The Doing of Theology
第一章 神についての学び：第一項目 神学の性質
第一節 教理の学びとしての神学
第四段落翻訳

2. 神学は組織的である。それは聖書の各書をばらばらには見ない。人間の罪深さのような、ひとつの与えられた主題に関して、聖書全体が何と言っているのかをひとつの一貫性をもつ全体においてまとめようと試みるものである。

解説 by Aguro

「人間の罪深さのような、ひとつの与えられた主題に関して、聖書全体が何と言っているのかをひとつの一貫性をもつ全体において」とあります。そうです。聖書は、おおきく分けて「啓示、神、人間、キリスト、聖霊、救い、教会、終末など」について語っています。その人間論の中に「罪論」があります。罪については「罪論」の中で広く深い議論や展開がなされていきます。

先月より、関西聖書学院で「罪論」の講義をしていましたので、一度「罪について」の一連の礼拝説教をチャレンジしてみようと思いました。そして講義レジュメ「第20章 罪の性質と源」（空間を超えたクラスルームに掲載）を参考にメッセージを準備しました。特に「第二項目 罪の性質に関する聖書的眺望」は、そのまま説教の主題になりました。第一週は「罪は内的傾向である。」第二週は「罪は反逆・不従順である。」第三週は「罪は霊的不能である。」

」第四週は「罪は神の基準の不完全な達成である。」第五週は「罪は神の置き換えである。」と主題設定してメッセージしました。もちろん、導入や会衆の生活の脈絡へのコンテクスチュアリゼーションにはいろいろと工夫をこらしました。ただ、思ったことは、組織神学というのは、「罪」という非常に扱いにくい主題を、ちょうど「光」をプリズムでスペクトル化して7つの色に分けることができるように、「罪」という主題をスペクトル化して5つのわかりやすい主題とみことばに分類することができるものでもあるということです。

また、5つの主題に分類しただけではなく、そのひとつひとつの主題をひとつの方向に、つまりちょうど地中深く石油を掘削するホーリングの作業のように、第一週の「内的傾向」においては、マタイ5：21 - 22, 27 - 28を掘り下げ、第二週の「反逆・不従順」においては、ローマ2：14 - 15を掘り下げ、第三週の「霊的不能」においては、ローマ2：21, 28を掘り下げ、第四週の「神の基準の不完全な達成」は、マタイ6章を掘り下げ、第五週の「神の置き換え」は、出エジプト20：3を掘り下げることによって、テレビ・ドラマでいうなれば、5週間にわたる興味深い”連続ドラマ”、つまり連続の”シリーズ説教”が可能とされたのです。メッセージの導入においては、前回までのメッセージを簡単に振り返り、建造物を構築していくように、相互の関連性に少しだけ言及して語るとさらに会衆の霊的理解の成長に役立ちます。

コックさんが、この料理には”どのような材料”が必要なのかをよく知っていますように、またその材料を”どういう手順で調理すれば、どのようにおいしい料理ができるのか”をよく知っているように、みことばの料理人である私たちも「罪」というひとつの主題に関しても、”どのようなみことば”があるのか、そしてそのみことばから”どのような料理（説教）”ができるのか、その”料理（説教）をつくる手順はどのようであるのか”に精通することにおいて成長していくことが大切だと思います。組織神学は、そのような意味において”説教調理学”であるのです。フランス料理のコックさんはフランスの有名料理店で修行して学ぶようです。私たちは、説教調理学のエキスパートであるエリクソンの下で修行を積んでいきたいと思ひます。

=====
[1999年7月29日 22時4分49秒]

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson
Part 1. The Doing of Theology
第一章 神についての学び：第一項目 神学の性質
第一節 教理の学びとしての神学
第五段落翻訳

3. 神学は人間文化の脈絡においてなされる。特にそのより進んだ、専門的な意味において、神学は聖書の教えを同じ主題の事柄を扱っている他の学問において見出されたデータと関連づけねばならない。

解説 by Aguro

「神学は聖書の教えを同じ主題の事柄を扱っている他の学問において見出されたデータと関連づけねばならない。」この今日の学問との脈絡に取り組んでいます点がエリクソンたち、今日の若手の福音主義の神学者たちの特徴です。

これはH. G. ペールマンが「現代教義学総説」において教義学（組織神学）

の四つの機能ということで、1.教義学の実存的（ないし教会的）機能、2.教義学の再生産的（ないし要約的）機能、3.教義学の生産的（ないし新理解的）機能、4.教義学の合理的（ないし学問的）機能の分類における、第4の機能です。

エリクソンの「キリスト教教理入門」をみてみますと、人間論や罪論などの扱い方において、今日の思想や神学の動向に必ずふれているということです。今日の思想や神学の動向というものは、今日の人々の状況の反映であり、それらのパースペクティブやエッセンスを抽出し分析したものであります。ですから、「人間文化の脈絡においてなされる」神学は、私たちの説教の対象の研究でもあります。「第17章 人間論への導入」においては「1.機械としての人間、2.動物としての人間、3.宇宙の（ちっぽけな）種子としての人間」という「今日における人間観」を扱っています。今日の人々がどのような人間理解の下に生かされているのかを知った上で、「人間についての聖書の見方」を提示していつているのです。このようなアプローチは、説教においても大切だと思います。つまりいきなり「聖書は...と語っています。」とやっても、会衆の心の琴線にはひびかないのです。そうではなく、今日の一般の人々がいったいどのように人間存在というものを考えているのかを描き出してから、「今日の世界では、今日の人々は人間存在について...と語っています。しかし聖書では...というかたちでさらに深い人間理解を示しているのです。」とともっていくことによって、メッセージはより深く人々の心の奥に届くようになるのです。

ホテルでの食事であれば、最初にスープが出てきまして、野菜、肉・魚、そして最後にアイスクリームとコーヒーというかたちでフルコースということでしょうか。小集会では「いきなり本論」でよいかもかもしれませんが、日曜礼拝においてはある程度の時間があるのですから、フルコースを念頭に「今日の人々の考え方・動向」にふれつつ、さりげなく「本論である聖書では...と語っています。」と発展させていくことが良いと思います。エリクソンの「キリスト教教理入門」は「肉・魚（教理）」のみでなく、「スープや野菜（今日の思想や神学の動向）」についても分かりやすく教えています。それはちょうど、スーパーである程度調理された料理の材料のような感じのものです。私たちがエリクソンの材料に、いくつかの手を加えますと、かなり短時間でかなり手の込んだ料理（メッセージ）ができあがるということです。あなたは、この”電子メール講義集”の数だけ、かなり簡単なしかし内容のある手料理（メッセージ）のレパートリーを保有することになるでしょう。超一流のシェフ（説教者）となれるどうかはあなたの努力次第ですが、ある程度の継続的な学びと工夫によるだけで”一流の説教者”になれることを約束できると思います。

=====

[1999年7月29日 22時6分6秒]

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson
Part 1. The Doing of Theology
第一章 神についての学び：第一項目 神学の性質
第一節 教理の学びとしての神学
第六段落翻訳

4. 神学は今日的なものである。神学的研鑽の目的は、時間を超えた聖書の真理を今日生きている人々に理解できるようなかたちで再陳述することである。

これはH・G・ペールマンが「現代教義学総説」において教義学（組織神学）の四つの機能ということで、1.教義学の実存的（ないし教會的）機能、2.教義学の再生産的（ないし要約的）機能、3.教義学の生産的（ないし新理解的）機能、4.教義学の合理的（ないし学問的）機能の分類における、第3の機能です。

「時間を越えた聖書の真理を今日生きている人々に理解できるようなかたちで再陳述すること」とエリクソンは定義しています。それは、H・G・ペールマンの「?教義学の生産的（ないし新理解的）機能」と対応しています。

伝統的関連以上に重要なのは教義的神学（組織神学）の状況的関連です。それは - 釈義や教会史のように - 聖書的 - 教會的ケリュグマをただオウム返しに語るのみではなく、むしろまさに新しく語らねばならない。伝統をただ単に要約するにとどまらず、新しく理解することが必要とされているのです。それは“かつてそうだった”と語るのではなく、むしろ“現在こうである”と語るのである。いわゆるコンテクスチュアルな神学の必要性である。

このあたりにつきましては、エリクソンは「第二章 キリスト教のメッセージを今日化すること」において、詳細な議論を展開していますので、そのときに詳述したいと思います。よく「メッセージは適用から始まる。」と言われます。それはまさしくこの「新理解的機能」であり、「今日化の課題」であり、「コンテクスチュアルな神学の必要性」です。私たちは、聖書を解釈して、それだけでこと足れりとしていることが多いのではないのでしょうか。反省させられます。

エリクソンの組織神学において最もユニークで新鮮な章は、この「第一部 神学をすること」の「第一章 神についての研究」と「第二章 キリスト教のメッセージを今日化すること」です。神学することの方法、手順、目標の輪郭がはっきりとみえてきます。それは、そのままメッセージの準備の方法、手順、目標のあり方と軌を一にしています。

* H・G・ペールマン「現代教義学総説」の『組織神学の四つの機能』に関しましては、ホームページの「一宮基督研究所」の中の「関西聖書学院講義録」の中の「継続神学研究」の中に「神学の今日的動向」のファイルに簡単に記述しています。

[1999年7月29日 22時8分11秒]

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson

Part 1. The Doing of Theology

第一章 神についての学び：第一項目 神学の性質

第一節 教理の学びとしての神学

第七段落翻訳

5. 神学は実際的なものである。パウロは教理を、単により多くの情報を知るようになるために、彼の読者に情報を与えようと説明したのではなかった。むしろ彼は、彼が説明した教理が生活のすみずみにまで適用されることを意図していた。もちろんキリストの再臨の教理は推測の対象となる。つまり人々は他の出来事との関連においてそれがいつ起こるであろうと確かめることを試みる。しかしながらパウロは、第一テサロニケ人への手紙 4：16 - 18において彼の読者にこの真理をもって互いに安らかであるように勧めて

いる。

新改訳 第一テサロニケ

「4:16 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、4:17 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。4:18 こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい。」

主が戻ってこられる、そして彼を信じたものはすべてよみがえらされるであろうということは、ほとんどの価値あるものが破壊されるように思われる世界において平安と勇気の源である。

< 解説 by Aguro >

宇田進師の日本基督神学校報の「神学研究の見取り図」(下)における記述に以下のようなものがあります。「しかしながら、最近あらためて考えさせられていることは、そもそも神学というものは、本来、深い意味において、”実践的”性格のものであるということです。ここで松村克巳師の次のことばに注目したいと思います。『神学の目指す真理はあるものではなくして成るものであり、単に客観的・対象的なものではなくして同時に主体的なものである。信仰的生は生の一部ではなくして根源的・徹底的な生であり、絶えず生成しつつその真理を現実として示す歴史的な生であることを知っている。...人間における根源的な生は学への要求を内臓し、学を媒介として自らを深めまた豊かにする。学問とは本来、生の実現と展開の契機であって、その追求する真理とは<生>の真理にほかならない...この<生きる>ということ、しかも根源的に、根源から生きるということ、本当に生きようとする、そこに宗教的生の真面目がある。神学がこのような生と関わる学であるとするなら、それは深い意味において実践的であり、実践的な課題が神学を動かす挺子であり、またその試金石となることは容易に理解されるであろう。』(『教会教義学講座』第一巻、39 - 40頁)」。

「神学は実際的なものである。」という本質を、きわめてうまく表現された記述です。『教会教義学講座』第一巻、松村克巳、をもう一度読んでみようと思います。

=====

[1999年7月29日 22時9分20秒]

記事タイトル: 第二節 教理の学びの必要性

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson
Part 1. The Doing of Theology
第一章 神についての学び: 第一項目 神学の性質
第二節 教理の学びの必要性

第一段落翻訳

そこに本当に教理の学びの必要性があるのか。もし私がイエスを愛しているなら、それで十分なのではないか。ある人々の見方において、教理は不必要なものであるだけでなく、それは、願わしくないもの、不一致をもたらすものである。しかしながら、そのような学びがどちらでもよい選択的なものではないいくつかの理由が存在する。

<解説 by Aguro>

エリクソンは、「教理の学びの必要性」についていくつかの理由が存在することを指摘しています。彼は、1. 信仰者と神との関係において、2. 真理と経験の結びつきにおいて、3. 私たちの信仰と競合する世俗や宗教の思想の体系の存在、について言及しています。明日からそれに取り組みましょう。

=====
[1999年7月29日 22時11分5秒]

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson

Part 1. The Doing of Theology

第一章 神についての学び：第一項目 神学の性質

第二節 教理の学びの必要性

第二段落翻訳

1. 正しい教理的信仰は、信仰者と神の関係に必須のものである。それでたとえば、ヘブル人への手紙の著者は、[新改訳] ヘブル人への手紙「11:6 信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならないのです。」と言った。また神との正しい関係の重要性は、イエスの人間性における信仰でもある。ヨハネは[新改訳] ヨハネの手紙第一「4:2 人となって来たイエス・キリストを告白する霊はみな、神からのものです。それによって神からの霊を知りなさい。」と書いた。パウロはキリストの復活の重要性を[新改訳] ローマ人への手紙「10:9 なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。10:10 人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」と強調している。

<解説 by Aguro>

「イエスの人間性における信仰」、「キリストの復活の重要性」など、正しい教理的信仰が、信仰者と神の関係に必須のものであることが語られています。キリスト教信仰は、最初から神秘主義的宗教ではなく、信仰告白的宗教であり、自分が学び、受け、信じたところを神と人に告白する信仰です。神が、啓示の神であるということは、キリスト教の固有の要素です。

聖書には、一定の信仰箇条を示すものがあります。「使徒たちの教え」（使徒2:42）、「伝えられた教え」（ローマ 6:17）、「聞いた健全なことば」（2テモテ 1:13,14）などが、礼拝・宣教・教会形成の基盤・土台でありました。初代教会は、それらの信仰箇条を厳粛に次の世代へ伝達（1コリ 11:23~）して

いきました。それらのものには、バプテスマ（使徒2:42）や聖餐式の定式文、讚美歌（エペソ 5:14,ピリ 2:5-11,1テモ 3:16）、定式化した祈祷文（1コリ 12:3, 16:22,黙示22:20）があります。信仰箇条は、入会者への教理教育、信仰告白の確立の問題（使徒8章参照）、異端に対する正統的信仰の弁証（ガラテヤ,コロサイ1ヨハネ各書参照）などに用いられてきました。

=====
[1999年7月29日 22時12分3秒]

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson
Part 1. The Doing of Theology
第一章 神についての学び：第一項目 神学の性質
第二節 教理の学びの必要性
第三段落翻訳

2. 教理は、真理と経験との結びつきのゆえに重要である。私たちの時代は、即座の経験が高く評価される時代のひとつである。それで多くの人々は、それらがもたらしてくれる興奮とか刺激のゆえに麻薬を利用する。幻想がある人々に満足する経験をもたらす。しかし長期間影響されるところの経験はリアリティに依存する。高い建物の上階から飛び降りる人は、下に向かってそれぞれの階の窓を過ぎるときに「気持ちいい！」と叫ぶかもしれない。しかし最後には事実が彼の経験に追いつくことになる。イエスについての単なる良い感じは、彼が本当に神の御子であるかどうかの問題と分けて扱われることはできない。未来に対する望みは、彼が復活したかということと私たちがいつの日にか復活するだろうかということに依存する。

<解説 by Aguro>

使徒たちがのべつたえた福音とは何であったのでしょうか。ひとことで表現するならば、ピリポがエチオピアの宦官に「イエスのことをのべつたえた」（使徒8：35）とあるように、イエスであったと言えます。

しかし、そのイエスを使徒たちは実際にどのように提示したのでしょうか。第一の要素は、福音の事実です。ナザレのイエスが十字架で死に、三日目によみがえられたということです（ルカ1：1、24：14, 18、1コリント15：3 - 5）。使徒たちののべつたえた福音は、人間の想像の産物とか、人間の内的神秘的体験というものではなく、歴史的事実に根ざしたものでありました。

< The Jesus of History and the Historical Jesus >

この主題に関連しまして、「歴史上のイエス」と「史的イエス」の問題に触れてみたいと思います。この問題は福音書記者によって描写されています。「福音書のイエス」は「歴史上のイエスの実像(The Jesus of History)」と一致するかどうか、という問題です。そして「史的イエス(the Historical Jesus)」とは、「福音書のイエス」から超自然性を破棄したイエス像のことです。というのは、超自然性は、信仰者の目によって色づけられたイエス像であり、1世紀の神話的世界像に属するものであり、20世紀の科学的世界観に生きる人間にとって受け入れられないものとの指摘です。ただ、ブルトマンは歴史的・批評的方法の限界を明示しており、歴史的・科学的方法とされ、「史的イエス」=歴史上の

イエスとみられたオールド・リベラルの方法に明確な前提があることを指摘しました。彼は「歴史上のイエス」の再構成を不可能と認識し、教会の所産としての「福音書のイエス」をみるのみであり、歴史的アプローチは不可能としました。

ブルトマンに対して、G.E.ラッドは、「福音書のイエス」の肖像は、信仰者の目によって歪んだものではないこと。事実と記述はイコールでも、対立でもなく、二つにしてひとつのもの、ひとつにして二つのものであることを示しました。「福音書のイエス」の肖像は、イエスが神御自身としての意識をもっておられたことを証言しています。「歴史上のイエス」は再構成不可能です。合理的な人間経験の中で、すべてのものを判断し「福音書のイエス」の肖像から神的側面を破棄し、「史的イエス」を再構成することによって、「歴史上のイエス」を描くことは不可能です。

わたしは、「福音書のイエス」の肖像が、信仰者によって創作されたものではなく、事実としての超自然性をもたれた「歴史上のイエス」を弟子たちが正直に描写したものと信じています。

参考文献 "A Theology of the New Testament" G.E.Ladd、「新約聖書と神話論」R.ブルトマン、「福音主義キリスト教と福音派」宇田進。

=====

[1999年7月29日 22時13分36秒]

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson
Part 1. The Doing of Theology
第一章 神についての学び：第一項目 神学の性質
第二節 教理の学びの必要性
第四段落翻訳

3. 教理の正しい理解は、そこに今日の私たちの信仰と競合している、多くの世俗的なそして宗教的な思想の体系が存在しているゆえに重要である。共産主義の基盤であるマルクス主義は、長らく多くの人々の忠節を要求してきた。人気のある自助哲学や自助心理学も溢れている。宗教の選択においても、キリスト教教派のかなりの多様性に加えて、膨大な数の分派や邪教めいたものが存在する。そして代わりの宗教は外国において見られるだけでなく、アメリカ合衆国において注目に値する数の帰依者を主張している。それゆえ人が信じているかどうかだけの問題ではなく、人が何を信じているかどうかの問題なのである。

< 解説 by Aguro >

「競合している、多くの世俗的なそして宗教的な思想の体系の存在」の指摘に関連して、古屋師の「宗教の神学」をみてみましょう。古屋師は、「世界的な宗教の多元化現象である。...現在そして将来にむかってますます世界的規模で進行しているのは、一つの宗教ではなく複数あるいは多数の諸宗教が一つの国あるいは社会において共存するという状況である。...今後ますますこの状況が進むということは、先祖代々の宗教や家の宗旨、あるいは部落の寺や村の神社だからではなく、私個人がこの宗教をよいと信じるから、というので自分で宗教を選ぶ時代になりつつあるということである。そうすると当然のように、宗教とは一体何なのか。どの宗教もみな同じなのか、宗教

のよしあしの判断基準は何なのか、といった問いがでてくる。」と今日
の状況を分析しておられます。

そしてそのような中で「なぜキリスト教なのか」と問いかけておられます。
東京神学大学の大本師は、教会史を、第一は環地中海のキリスト教の時代、
第二は環大西洋のキリスト教の時代、第三が環太平洋のキリスト教の時代と
三つに区分されています。環地中海時代の問いは「キリスト教とは何か
(What Christianity?)」つまり教義学が問題であり、環大西洋時代の問
いは「キリスト教をいかに生きるのか(How Christianity?)」つまりキリ
スト教倫理学が問題とされており、環太平洋の時代の問いは「なぜキリス
ト教なのか(Why Christianity?)」つまりキリスト教の存在理由がとわれて
いると指摘されています。

「それゆえ人が信じているかどうかだけの問題ではなく、人が何を信じてい
るかどうかの問題なのである。」わたしたちは、以上のような問いをも視野
におきつつ、立体的に掘り下げていきたいと思えます。

[1999年7月29日 22時14分33秒]

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson

Part 1. The Doing of Theology

第一章 神についての学び：第一項目 神学の性質

第二節 教理の学びの必要性

第五段落翻訳

おびただしい二者択一を扱う方法は、徹底的な論破とそれらの欠けている
点を体系的に露呈することをほのめかしてきた。しかしながらキリスト教信
仰の見方を教えることの積極的なアプローチはよりましなものであるように
思われる。このアプローチは、二者択一の立場を判断する基盤を提供する。
合衆国財務省は、たくさんの偽札を示すことによってではなく、何を感じる
か、どのように見えるかを彼らが正しく知るようになるまで、本物の合衆国
の通貨を継続して彼らにさらすことによって、偽札の鑑定をする人を訓練す
るという類比を考慮しなさい。彼らは結局、悪しき特徴の存在によってだけ
ではなく、正しい特徴の欠落(あるいは偏差)によって偽物を見破ることが
できるだろう。

解説 by Aguro

「徹底的な論破とそれらの欠けている点を体系的に露呈すること」につい
ては、諸宗教の対話という土俵の中で「宗教の神学」の視点を提示しておられ
る稲垣久和教授「大嘗祭とキリスト者」と古屋安雄教授「宗教の神学」をおす
めしたい。前者はオランダからのキリスト教哲学の手法による分析であり、
「原質」と「形式」という基本概念がその理解を非常にわかりやすいもの
にしています。後者は、アメリカからの社会学的分析の手法が大変説得力の
ある内容を構成しています。諸宗教とキリスト教に関心のある方にはぜひ一
読してほしい書籍です。前者に関しましては、私の比較宗教学講義のテキ
ストですので、講義テープもあります。

「偽札の鑑定をする人の訓練」の例話の挿入は、エリクソンの組織神学書
の特徴のひとつです。ウォッチマン・ニーの著書であります「『キリスト者
の行

程』は、...アンドリュー・マーレーやF．B．マイヤーのそれと同様に恵み深く、例証的なスタイルをもったケズィックの教えのそれである。」と評されています。私はエリクソンの神学もまた、"例証的なスタイルをもった"組織神学であると思います。「説教とは、みことばプラス例話だ。」と言われます。はっきりみことば提示ができ、それをぴったり説き明かす例話があれば、良い説教ができるという意味です。ことばで聞くとわかりにくい道順でも、地図を書いてもらうと一目瞭然です。例話の役割はその地図のようなものです。

[1999年7月29日 22時15分20秒]

記事タイトル: 第三節 科学としての神学

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson
Part 1. The Doing of Theology
第一章 神についての学び：第一項目 神学の性質
第三節 科学としての神学
第一段落翻訳

ときどきひとつの疑問が高等教育機関におけるキリスト教教理の研究の正当性に関して生起してきている。神学の教えは、単に教え込むことではないのですか。確かに与えられた宗教の形式をもって公式の結びつきをもつことができない公立教育機関においてキリスト教神学を教えることには限界がある。しかしながら、他の諸宗教と同様にキリスト教についての客観的・科学的な研究を禁止すべきことは何もない。私立教育機関において、そして特にキリスト教への献身を明らかにしている教育機関においては、キリスト教教理の学びはまったく適切なものである。それは他の学問と比べていかなる意味においても劣っているべきではない。

解説 by Aguro

宇田進師の講演のレジュメ「日本の福音主義神学に未来はあるか」の中にそのための四つの特質が記述されています。それは、1. 聖書的適格性、2. 正統的公同性、3. 現代的適応性、4. 自己革新・批判的学問性です。

この中の「4. 自己革新・批判的学問性」が「それは他の学問と比べていかなる意味においても劣っているべきではない。」と点にあたります。それは稲垣久和師の「進化論を斬る」や「大嘗祭とキリスト者」における進化論や諸宗教の扱い方にもあらわれています。エリクソンが言う「学問的脈絡」も同じことです。私はもし聖書が完全に理解されたとき、そしてもし創造の世界が完全に理解されたとき、両者は完全に調和すると思います。

宇田進師の指摘されている四つの特質は、このホームページの内容において追求している特質でもあります。

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson
Part 1. The Doing of Theology
第一章 神についての学び：第一項目 神学の性質
第三節 科学としての神学
第二段落翻訳

研究のための正しい主題であるために、ある意味で神学は科学でなければならない。私たちは、それが自然科学の狭い意味における科学でなければならないということの意味していない。むしろ、それは科学的な知識の伝統的な基準のいくつかをもっていなければならない。1. 研究についての明確な主題、2. 主題となる事柄を研究し、主張を立証する方法、3. 研究が学習者の直接の経験外の現象を扱い、それゆえ他者による研究への近づきやすさを扱うという意味での客観性、4. 主題の事柄の命題の間の一貫性、その結果その内容は一連の無関係あるいはバラバラの事実というよりむしろ、知識の明確な体系を構成しうる。

< 解説 by Aguro >

エリクソンは、「科学的な知識の伝統的な基準」として、1. 明確な主題、2. 研究方法、3. 客観性、4. 一貫性、をあげています。そしてその結果として研究内容が「知識の明確な体系」を形作ると指摘しています。

ここで、科学の方法と神学の方法の類比を基本においた19世紀アメリカの組織神学者チャールズ・ホッジの神学方法論をみてみましょう。

「自然科学が自然の諸事実を法則へと組織化していくように、組織神学は聖書の諸事実を組織化し、その諸事実が含む原則と一般的真理を確証していく。そして自然と自然科学者との間の関係に似たものが、聖書と神学者との間に存在している。つまり聖書の中には、神学者が認定し、収集し、配列すべき諸事実がある。聖書中の諸事実を、内的連関に従って構成し、体系づけ、法則としてまとめあげていくのが組織神学者の役割である。神と神と人間について啓示している諸事実（それらはすべて聖書中に含まれている）を体系づけるために、神学者は帰納法を使う。その場合、諸事実の収集が不完全であると、誤った教理体系ができてしまう。また、あらかじめ神学者の精神の中に存在する理論に合わせて聖書の諸事実を体系づけることもできない。あくまで聖書に啓示された客観的な諸事実が神学理論を決定していくのである。」

「以上のようなホッジの方法論は、明らかに、創造者なる神の与えたもう二冊の書物、すなわち神のみわざを記した書物（The Book of God's works）と神のみことばを記した書物（The Book of God's words）とを人間は同時に知ることができる、と理解したフランシス・ベーコンの考え方の延長線上にある。」

ホッジの神学方法論には、いろいろと教えられるところがありますが、今日の若手の福音主義神学者たちは、ホッジの神学方法論の盲点を指摘しています。J・デービスは「神学の文化脈化（contextualization）という観点から、ホッジの方法論をコンコードダンス・モデルと名づけている。このモデルは聖書の啓示の本質を有機的全体（organic whole）として捕らえる点では優れているが、社会的コンテクストや歴史に対する神学的考察が入る余地がない。」と批判しています。

エリクソンの組織神学の定義を参考に記述しておきますと、組織神学とは

「1.第一義的に聖書を基盤とし、2.文化一般の脈絡の中に置かれ、3.今日の用語において表現され、4.生の諸問題に関連する、キリスト教信仰の諸教理についての首尾一貫した陳述を与えるよう努めるところの学問」であります。エリクソンの定義におきましては、ホッジにおいてみられるような過去の福音主義神学者たちの特色であります「聖書性」や「組織性」に加えまして、「文化への脈絡性」「今日性」「実際性」が視野にあることが明白です。これらの点がエリクソンの神学著作集の魅力になっていると思います。

参考文献

「知と信の構造」稲垣久和、ヨルダン社、pp.305-307
"Christian Theology" M.J.Erickson, Baker, p.21

[1999年7月29日 22時18分22秒]

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson

Part 1. The Doing of Theology

第一章 神についての学び：第一項目 神学の性質

第三節 科学としての神学

第三段落翻訳

私たちがそれをもって扱うとき、神学はそれらの基準にかなうものとなる。それはまた、他の諸科学と共通の土台を占めるものとなる。1.それは他の諸学問が受け入れているように、同じ論理のルールを受け入れる。難しいものが現れるところで、神学は単に矛盾とか不可解で祈り求めたりはしない。2.それは伝達可能なものである。-それは命題的なことばの形式において表現されることができる。3.ある範囲まで、それは他の特別な諸学問、特に歴史や哲学によって使用されている方法を使う。4.それはいくつかの主題の事柄を他の諸学問と分かち合う。そのように、そこにはすくなくとも自然科学、行動科学また歴史のような他の諸学問によって、確証されたり、反駁されたりするいくつかの命題の可能性が存在する。

< 解説 by Aguro >

「他の諸科学と共通の土台」に関して、1.同じ論理のルール、2.伝達可能なもの、3.諸学問で使用されている方法、4.主題の事柄を他の諸学問と分かち合う、というポイントがあげられています。

学問との脈絡に関連しまして、宇田進師の言及がありますので紹介させていただきます。その中において「自己革新性」「批判的学問性」「キリスト教有神論というパラダイムに立った批判的学問性」の必要性が記述されており、この作業において、「敬虔主義運動（信仰復興運動）、自由教会（フリーチャーチ）の伝統、アメリカ・ファンダメンタリズム、の三者の混交・混合（シンクレタイジング）のプロセスを通して産み落とされていった”特異なメンタリティー”を徹底的に精査し、主体的に評価しなおすことであろう。この自己批判的作業なくして未来は開かれてこないのではないか。」と語られています。

この特異なメンタリティーとは、
「1.教会の歴史的伝統との関係を絶ち、イエスおよび初代教会の教えと実践に直接つながろうとする”Primitism”（原始主義）。みことばと御霊さえ

あれば、教会の過去の歴史的遺産とは無関係であるとする傾向。

2. 「教理や信条ではなく、生命・生活である」、神学抜き「心情の宗教」、
「生活の宗教」という一種の二元論分裂思考。

3. 聖書主義 (biblicism) - そこにはキリスト教の全体的体系的理解と福音
の全真理間に見られる内的構造の把握と各教理を扱う際のバランス感覚が見
失われていく。

4. 「魂を救うこと以外には、何のかかわりも」 - 教会の目的を伝道事業に
しぼるといふ伝道至上主義への一面的な偏向と、その背景となっている歴史
的悲観論・文明滅亡論および神の支配 (dominion) モチーフ (kingdom
- theology) の事実上の喪失。

5. 問題を単純化し、物事を単純なアンティテーゼで見ようとするリバイバ
リズムより受け継いだ体質 (ニーバーが指摘する「キリストと文化」の対立
的な味方)。

6. 反知性的傾向と反動性の貧困およびその非生産性の問題 - 啓蒙思想の主
張する理性ならびに近代西洋文明の人本主義的精神に反対するあまり、次第
に誤って宗教と知性とを対立させる傾向を強めていったために、信仰と理性
の正しい関係論を見失ってしまった。その結果、生の全領域におけるアカデ
ミックな活動が姿を消し、学的主導権はリベラル派の手に渡ってしまうとい
う事態を招いて今日に至っている。

7. リベラリズムとの論争とを通して作り上げていった分離主義 (separatism)
と自己閉鎖的、自己防衛的体質。

である。」

これらの特異なメンタリティーを徹底的に精査し、主体的に評価しなおす
作業、自己批判的作業のプロセスのひとつとして、エリクソンの神学著作集
や宇田進著作集などについての I C I 研究活動であります。

参考文献

「日本の福音主義神学に未来はあるか」宇田進

[1999年7月29日 22時19分57秒]

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson

Part 1. The Doing of Theology

第一章 神についての学び：第一項目 神学の性質

第三節 科学としての神学

第四段落翻訳

そしてまだ神学はそれ自身のユニークな立場をもっている。その主題とな
る事柄のいくつかは、例えば神のようにユニークである。それはまたユニ
ークな方法においてではなく、共通の主題を扱う。例えば、それは人々を神と
の関係の用語において考慮する。そのように、キリスト教神学とかキリスト
教教理の学びは科学であるけれども、それはそれ自身特別な立場をもつ科学
である。それは自然あるいは行動のいくつかの他の科学に減じられてしまう
ことはできない。

< 解説 by Aguro >

キリスト教哲学者であり、科学者である稲垣久和師は「知と信の構造 - 科
学と宗教のコスモロジー - 」の付記「神学と科学の方法論をめぐって」にお

いて、「神学と科学の関係でわれわれが論点とすべきところは、大別して次の三点であろう。1.『科学対宗教』と表現されるような思想上の葛藤の問題。2.科学と神学の学問的方法論上の相違と類比の問題。3.創世紀1章に典型的に見られるような聖書解釈と科学的知識の関係と区別の問題。」と指摘して、それらについて言及しておられます。3.の点について少し紹介します。

「B.ラムはかつて『科学と聖書』の中で、自然記述に関する聖書言語の特質として次の四つを挙げた。1.日常的、2.現象的、3.非理論的、4.当時の文化の反映。聖書は明らかに、科学の専門家を対象にした『科学言語』で書かれているのではなく、一般の人々に分かる『日常言語』で書かれている。」

「神学と科学の関係はどちらかどちらかを基礎づけることではない。それらは実在の異なる様態的局面に関する個別科学である。キリスト教的な科学とは、聖書の創造を科学的に『検証』することではなく、創造、墮落、イエス・キリストによる聖霊の交わりを通しての贖罪といった前理論的な宗教的根拠動因によって科学そのものの存在論的、認識論的、倫理的基礎付けと方向を与えることである。諸科学は狭義の神学という一理論科学によって基礎づけられるのではなく、神学をも含む諸科学が、聖書的な有神的根拠動因によって基礎づけられねばならないのである。」

神学と科学の関係について、私たちはしばしば誤解しているのではないかと思います。これらのことについても、「神のみわざ論」の中「創造論」を扱うときにもう少し詳しく言及してみたい。

=====

[1999年7月29日 22時20分55秒]

Q : N . O

> ただいま、第一章第一項目第三節「科学としての神学」を勉強
> しているところですが、質問させてください。
>
>> 問題を単純化し、物事を単純なアンティテーゼで見ようとする
>> リバイバリズムより受け継いだ体質（ニーバーが指摘する「キ
>> リストと文化」の対立
>> 的な見方）。

>
> これは、ラインホルト・ニーバーのことでしょうか。あるいは
> H.リチャード・ニーバーのことでしょうか。

H.リチャード・ニーバーのことです。

彼は、その著書「キリストと文化」（邦訳版/日本基督教出版局）において、キリストと文化の関係を類型化して述べています。おおざっぱにしか読んでいませんので、輪郭のみの紹介とさせていただきます。

- 1.文化に対するキリスト "Christ Against Culture"
- 2.文化のキリスト "The Christ of Culture"
- 3.文化の上にあるキリスト "Christ Above Culture"
- 4.矛盾におけるキリストと文化 "Christ and Culture in Paradox"
- 5.文化の改造者キリスト "Christ the Transformer of Culture"

私は、五番目の見方が一番すぐれているように思います。宗教と文化の
関係に関心のある方にはぜひ一読していただきたい書籍です。

なお「リバイバリズム」につきましては、「アメリカの宗教」S・E・
ミード（邦訳版／日本基督教出版局）の第七章「デノミネーションリ
ズム - アメリカにおけるプロテスタンティズムの形成」に詳しく記述
されていますので参考にしてください。

*以上、イニシャルにて、それぞれ掲示板の関連個所に付録としてQ
& Aを掲載させていただきます。

[1999年7月29日 22時21分56秒]

お名前: Q&A

- > 質問に答えてくださってありがとうございます！！
- >
- >> H・リチャード・ニーバーのことです。
- >
- > 不覚でした。わたし、H・リチャード・ニーバーの
- > 「近代文化の崩壊と徹底的唯一神論」（ヨルダン社）を持っているんです。

わたしはその書籍もっていません。しかし、古屋安雄師の「日本の神学」
の中の第八章「戦後の新しい日本」の中で、

- 1．「新しい国体」
- 2．変わらない精神的核
- 3．徹底的唯一神信仰
- 4．普遍的道德倫理
- 5．日本の伝道
- 6．せめて10%
- 7．日本の使命

という構成で、「3．徹底的唯一神信仰」つまり、H・リチャード・ニーバー
の「徹底的唯一神論」が中心的メッセージとして用いられています。

キリスト教国においても、「民族主義的キリスト教」、ナショナリズムとキリ
スト教という問題が存在する。それを克服しなければならない。多神主義の中
の単一神論＝「民族主義的キリスト教」ではなく、民族主義的エゴイズムを
克服するもっとも有効な手段としての「徹底的唯一神論」が主張されていたと
思います。

[1999年7月29日 22時22分56秒]

記事タイトル: 第四節 キリスト教教理の研究の出発点

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson

Part 1. The Doing of Theology

第一章 神についての学び：第一項目 神学の性質

第四節 キリスト教教理の研究の出発点

第一段落翻訳

私たちがキリスト教教理を研究するときすぐに直面するにちがいない問題のひとつは、私たちの知識が引き出されるであろう資料源である。キリスト教界においてさえ、いくつかの解答がもたらされてきた。

1. 自然神学...創造宇宙は神と人間の性質について確かな真理を決定するために研究される。(教理への経験的なアプローチは、三章において研究される。)
2. 伝承...照会は、彼ら自身をクリスチャンとして認知する個々人や組織によって主張され、教えられてきたものにおいてなされる。信じられてきたものは、信じられるべきものの規範とされる。
3. 聖書...聖書はキリスト教信仰を定義する文書また構成するものであると主張される。そのように、それは信じるべきところのものは何かそしてなされるべきところのものは何かを明確に述べる。
4. 経験...今日クリスチャンの宗教的経験は、権威ある神の情報を供給するものとしてみなされている。

< 解説 by Aguro >

エリクソンは「第一義的に聖書に基づく学」として組織神学を定義しています。プロテスタント福音主義の根本的特色は、1. 聖書のみ(規範・形式原理)、2. 恩恵のみ(実質原理：どこを切っても十字架の恵みが)、3. 神の相の下に(生活の全領域が神の光[支配]のもとに置かれている、神の主権を"生"全領域で認める)です。

神のご計画全体(使徒20:27)を把握しようとするとき、あくまでも聖書を基準とします。しかし今日の状況におきましては、"multiple-source"(多元)の考え方が強くなってきました。J. マッコリー(ユニオン神学校：ハイデッカーの「存在と時間」を訳した)は、"Principle of the Christian Theology"の中で「神のみむねの全体を把握するには...」、1. 経験、2. 啓示、3. 聖書、4. 伝承、5. 文化、6. 理性、の六つの要素をあげています。そして最も大切なものは「信仰経験」だと述べています。この六つの要素のうちのどれが他のすべてを律するのかは述べていません。つまり聖書が経験をチェックするものだとは言っていないのです。それぞれが相対的な価値をもつという考え方です。

私たちは、この相対的な考え方の強い時代において、なぜ「第一義的に聖書に基づく」のかを自己確認しつつ進むことが求められています。

=====

[1999年7月29日 22時26分2秒]

お名前: Q: J. S

Q: J. S

- > 安黒先生、いつもありがとうございます。
- > 第一章第四節第一段落の言葉で、
- > プロテスタント福音主義の根本的特色
- > ?神の相の下で・・・「相」???

- > 全体の意味はカッコの中に書いてくださっているので
- > わかるのですが。

A : by Aguro

いい質問だと思います。クラスメイトの方の中でも気になっている方もおられると思いますので、ICIメーリングリスト（空間を超えたクラスルーム）にて応答させていただきます。

私もどういう意味かなと気になっていた個所です。直接的な意味は、今回調べてみましたが、"coram Deo" はラテン語なのでよくわかりませでした。「神の相の下に」は"coram Deo" の直訳だと思います。あの項目は、宇田先生の講義のノートの一部です。

あそこを読んだとき、「聖書のみ」「信仰のみ」は分かりますが、「神の相の下に」"coram Deo" は新鮮に響きました。ただ、宇田師は「世界観キリスト教」ということばをよく使用されていたので、そのことだと分かりました。つまり、聖俗二元論的な世界観ではなく、この世界のすべての領域が神さまの光（支配）の及ぶ領域であり、神の主権を生すべての領域で認めることがプロテスタント福音主義の根本的特色であるということです。

ただ、この領域は、宗教改革において、萌芽がみられますが、それを発展させていったのは、後々の神学者でありオランダの総理大臣にもなったアブラハム・カイパーやそれに続くキリスト教哲学者であるヘルマン・ドイヴェルトたちであったといえます。このあたりの発展過程のことは、新キリスト教辞典の「キリスト教哲学」という項目に春名先生がまとめておられます。参考にしてください。

わたしの思い違いかもしれませんが、宇田師は「神の相の下に」という意味を「神のスペクトルの下に」という意味で使用されているのではないかと思います。これは「その説明に『生活の全領域が"神の光（支配）"の下に』」という文脈と重なり合っていることから推測できます。

共立モノグラフ「神の啓示と日本人の宗教意識」という書籍の中の「日本主義とキリスト教哲学」の中における「実在の構造」において、キリスト教哲学者である稲垣久和師は「社会の各領域の存在の仕方と社会全体の構造」についてドイヴェルトの理論を紹介されています。

そして創造された世界を十五の局面に、ちょうど「光がプリズムで分色されるように」、スペクトル化しておられます。これ以上は記述している資料をみていただけたらと思います。

要するに、「相」という文字を辞書を引きますと、「ありさま、姿、様子、真相、画相」とあります。その意味は、少し複雑ですが、上記のような内容を含んでいるものと思われます。参考にしてください。

[1999年7月29日 22時27分22秒]

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson
Part 1. The Doing of Theology
第一章 神についての学び：第一項目 神学の性質
第四節 キリスト教教理の研究の出発点

第二段落翻訳

私たちは第三のアプローチに従うだろう。同様の実践は、いくつかの憲章、憲法、また学校とは何であるべきか、そしてそれが従うべき手順、を定義している統合された文書をもっている種々の教育機関や組織において見出される。そのようなグループとか運動の本当の代表者である二つの要求者の間の論争が存在するところでは、通常その基本的憲法に従って考えられた政党の賛意において、法廷が判決をくだすだろう。私たちの国においては、憲法が義務づけられている。実際、憲法に矛盾するいかなる法律も法廷において無効と宣言される。

< 解説 by Aguro >

「第三のアプローチ」とは、聖書を第一の資料源、ある意味で唯一の資料源としてのプロテスタント福音派の根本的確信にそっています。宇田進師はその著書「福音主義キリスト教と福音派」の第二章の第四項「宗教改革の三大原理と福音派」の第一節「聖書のみ」において、カトリックとプロテスタントの聖書観を詳しく対比された後、「以上が聖書に関する宗教改革者たちのあかしである。『彼ら改革者たちのキリスト教理解の全体は、この"聖書のみ"の原理に依存していた。すなわち、彼らにとって聖書はこの世界における唯一の神のことばであり、個人と教会の唯一の指導者であり、真の神とその恵みを知るための唯一の源泉であり、過去・現在を通して教会のあかしと教えとをチェックする唯一の資格ある審判者であった。』（J.I.Packer: "'Sola Scriptura' in History and Today," God's Inerrant Word, 1974, pp48-49）」と記述されています。

「統合された文書をもっている種々の教育機関」は、「科学としての神学」の項目において、公立の教育機関と私立の教育機関が念頭にある言及かもしれません。公立とミッション・スクールにおいては、教育理念に相違があるわけですから。」

ここで少し歴史に触れますと、日本の過去において、明治32年に「私立学校令」が制定され、「こののち国家神道体制のもとでの学校教育における宗教の取り扱いの基本方針となった。こうして文部省は、宗教ではない建前の国家神道による教育を強行する反面、この官製宗教教育にとって無用であり、ときには有害のおそれすらある一般の宗教教育を、学校教育から締め出してしまった。宗教教育の締め出しは、私立学校である宗教関係学校の教育内容におおきな制約をもたらし、一般学校としての資格を保持しようとするかぎり、宗教学校は、本来の教義に立つ宗教教育を自主規制せざるをえなくなった。とくにキリスト教系の学校の多くは、キリスト教教育を本来の目的として設立されていたから、文部省が加えた圧力は、学校の存立そのものにかかわる深刻な問題であった。」戦後自由な時代がきたわけですが、まだ本来の自由な宗教教育がなされているようには思えません。かなりの自主規制がミッション・スクールの中に存在しているように思います。文部省の教育への規制・指導がどうであるのか、ということもあると思いますが、またミッション・スクールにおける「宗教教育」の位置づけにおける混乱もあると思います。このあたりに関しましては、古屋安雄師や稲垣師の書籍は参考になると思います。

「法廷が判決をくだす」「憲法に矛盾する」は、憲法改正などへの言及であり、政治や教育関係の世界で起こりうることです。しかし、クリスチャンの信仰における「憲法」=「聖書」に関しましてはそういうわけにはまいりません。それは明日扱います。

[1999年7月29日 22時28分11秒]

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson

Part 1. The Doing of Theology

第一章 神についての学び：第一項目 神学の性質

第四節 キリスト教教理の研究の出発点

第三段落翻訳

キリスト教の場合において、私たちはまた憲法、すなわち聖書を扱っている。クリスチャンは、イエス・キリスト御自身が規定された教えにおいて存続している人々である。彼らは、イエスやあるいは彼によって権威づけられた人々によって教えられ、実行されたことを、否定したりあるいは修正したりすることはできない。もちろん理論的に、その憲法を修正することは可能であるだろう。しかしながら人間の扱いにおいて、ただある人々がそのような修正をするために選挙で選ばれるということを書き留めなさい。外的な組織はその憲法を変えることはできない。キリスト教の場合において、その憲法、すなわち聖書はキリスト教会を作り上げた人間の手によって創造されたり公式化されたりはしない。その場合においては、神のみがその信仰と実践の基準を変更する権威をもっておられる。聖書は、それが正しい信仰と実践の権利を所有しているから、従われるべきところのガイドラインなのである。

< 解説 by Aguro >

エリクソンは、「憲法」と「聖書」を類比的に扱い、分かりやすく説明しています。その「憲法の修正の手続き」と「聖書の修正の手続き」を対照し、選ばれた人間によって修正される憲法と神のみによって修正可能な聖書を描写しています。ただ、人間の手によってなる憲法は、たとえば「明治憲法」から「昭和憲法」へと変えることができますが、神の手によってなる聖書は、普遍的な性質を有していますので、憲法修正とは次元を異にしています。それでは時代の変化の中で、聖書はどう扱われるべきなのでしょう。"Eternal Word in the Changing World" それを次回考えてみましょう。

=====

[1999年7月29日 22時28分59秒]

お名前: Q&A

Subject: 「相」という言葉

Q:

- > 第一章第四節第一段落の言葉で、
- > プロテスタント福音主義の根本的特色
- > 神の相の下で・・・「相」???
- > 全体の意味はカッコの中に書いてくださっているので
- > わかるのですが。
- > この漢字は「手相」という言葉に使われているような
- > 意味ですか。
- > すなわちたぶん、姿形というような？

A : by Aguro

" coram Deo " 「神の相の下に」...生活の全領域が神の光（支配）のもとに置かれている、神の主権を " 生 " の全領域で認めるの意。

" coram Deo " をアルタビスタという検索マシンで調べてみました。すると <http://www.joyministries.org/joycoram.html> というページに下記のような画面がありました。

Before the face of God" =>=>=> Coram Deo!

それで、Jバイブルで下記の文字を検索しました。

[新改訳] 検索文字列 "神" "顔"

すると、コラム・デオと関係あるみことばと見られる下記のことばをみつけました。

67:1 どうか、神が私たちをあわれみ、祝福し、み顔を私たちの上に照り輝かしてくださるよう。セラ

80:3 神よ。私たちをもとに戻し、御顔を照り輝かせてください。そうすれば、私たちは救われます。

80:7 万軍の神よ。私たちをもとに戻し、御顔を照り輝かせてください。そうすれば、私たちは救われます。

80:19 万軍の神、主よ。私たちをもとに戻し、御顔を照り輝かせてください。そうすれば、私たちは救われます。

現段階では、「コラム・デオ」は、「神のみ顔の輝きの下に」というような意味で使用されていると思います。

そして、その内容は前回記述させていただきましたような深みをもったものであると私は考えています。

[1999年7月29日 22時29分55秒]

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson

Part 1. The Doing of Theology

第一章 神についての学び：第一項目 神学の性質

第四節 キリスト教教理の研究の出発点

第四段落翻訳

世紀を通じてキリスト教は、正確にそのかたちのまま聖書の説明を繰り返してきたし、繰り返しつつあるであろうと言うべきではない。聖書のほとんどは歴史における特別な事例を扱っており、特別な状況に向けて書かれたものである。同じ様式において同じことばを繰り返すことは、その意味を捻じ曲げることになるだろう。むしろなされたところのものは、もしイエスとかパウロとかイザヤとかが現在の状況に手紙を書いたとしたら、彼らが語るであろうところのものを、今日に向けて表現されるべきである。これは基本的な意味を変えることを意味していない。そうではなくその再表現と再適用を意味しているのである。

< 解説 by Aguro >

「もしイエスとかパウロとかイザヤとかが現在の状況に手紙を書いたとしたら、彼らが語るであろうところのものを、今日に向けて表現されるべきである。」これは、組織神学における「生産的(ないし新理解的)機能」です。これについては、すでに記述してきました。しかし重要なことですので、重複をさけつつ、言及してみたいと思います。

組織神学は、聖書的な発言をただ単にモザイクの石のように、まとめて並べるだけでなく、移し並べる[翻訳する]、すなわち解釈学的課題(伝承されたテキストに火を投げ込む<技術>...)を遂行しなければならないのです。組織神学は、私たちの時代の言葉に、<聖書を翻訳する>機能を果たさねばなりません。組織神学は<論争術>つまり、キリスト教信仰と、教会の使信に対立する各時代の教えやイデオロギーとの思想的対決を前提とします。組織神学は、伝承された信仰の証しを現在に責任を負うべきものとして思考することがその内容なのです。

勇ましい内容ですね。ある有名な神学者は、「政治は神学の次に男らしい仕事である。」というようなことを語ったそうです。つまり神学の務めこそがこの世界で最も男らしい仕事であるということです。神学の務めを軽視するむきもありますが、私も「神学の務めこそがこの世界で最も男らしい仕事である」と思います。その意味は、神学をライフ・ワークとし、真剣に取り組んでいる人には分かります。

参考文献：「現代教義学総説」H.G.ペールマン、新教出版社

[1999年7月29日 22時30分48秒]

記事タイトル: 第二項目 神学の方法: 序

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson

Part 1. The Doing of Theology

第一章 神についての学び: 第二項目 神学の方法

序

私たちは、神学は科学であると言ってきた。それは特に、それがひとつの明確な手順をもっているということを意味している。私たちが記述するステップは、その順序にかならずしも厳格に従ってもらう必要はないけれども、それらには論理的な発展性が存在している。

< 解説 by Aguro >

エリクソンは、神学は「科学」であり、科学は「明確な手順」をもっていること、つまり神学を構築していく作業における「論理的な発展性」を指摘しています。以下にその九つのポイントを記します。

1. 聖書の材料の収集

2. 聖書の材料の整理
3. 聖書の教えの意味の分析
4. 歴史的取り扱いの吟味
5. 教理の本質のみきわめ
6. 聖書以外の資料からの光
7. 教理の今日的表現
8. 中心となる解釈の主題の発展
9. 論題の層形成

現在、関西聖書学院の神学生の「論文指導」を頼まれています。「安息」「子とされること」「救いの恵み - 客観的立場と主観的経験 - 」「内面的癒し」など、神学生が取り組もうとしている主題の領域があります。ただそれらの主題とどのように取り組み、種々の領域から材料を収集し、本質をみきわめ、その主題を発展させ、「問い - 答え」というかたちで論の層形成をはかっていくのか、という手順の確立がもっとも大切と思います。手をこまねいては、時間ばかりが過ぎてゆき、あせりの色が濃くなっていきます。エリクソンのこの九つのステップは、論文作成において非常に参考となる手順と思います。

明日から、これらの九つのステップを丁寧にひとつずつ取り扱っていきたいと思います。

[1999年7月29日 22時32分30秒]

記事タイトル: 第一節 聖書の材料の収集

 "Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson
 Part 1. The Doing of Theology
 第一章 神についての学び：第二項目 神学の方法
 第一節 聖書の材料の収集
 第一段落翻訳

最初のステップは、研究されるべき主題を扱っているすべての関連ある聖書箇所を確認すること、そしてそれからそれらを大変注意深く解釈することであるだろう。これは釈義として知られているプロセスである。釈義には最良の神学的道具と方法が使用されることが望まれるだろう。それらの道具には、コンコルダンス、注解書、そして原語を知っている人々には、聖書テキスト、文法、そしてレキシコンが含まれる。

< 解説 by Aguro >

組織神学を教えさせてもらうようになってから、聖書を組織神学的に読むようになりました。それ以前はと言いますと、最初はK G Kの交わりの中で教えられたアンダーソンの「静思のとき」に導かれて、毎朝夕に聖書を1章読んで5分間の瞑想のときをもつことが習慣となっていました。その次は、H. H. ハーレイの聖書ハンドブックを用いての丁寧な聖書通読をしました。それからは関西聖書学院でメリル・テニイやペテル聖書研究の「旧新約聖書

概観」を教えさせてもらうようになりまして、概観的な聖書の学びを深めました。そして組織神学となってきたわけです。

シーセンの組織神学を読んだときは、そう思わなかったのですが、エリクソンの組織神学を読み、また教えるようになりまして、エリクソンから「教理的説教」の秘訣のようなものを教えられているように思います。また聖書を組織神学的に深く読むということも。

最近、罪論から連続説教をしました。それはエリクソンのテキストの「罪の性質に関する聖書の眺望」という個所からでありました。五つの「罪の性質」に関する聖書個所から「1. 内的傾向（マタイ5：21, 22, 27, 28）、2. 反逆・不従順（ローマ2：14, 15、創世記2：16）、3. 霊的不能性（ローマ1：21, 28, 29 - 31）、4. 神の標準の不完全な達成（サムエル15：23、マタイ6：2, 5, 16）、5. 神の置き換え（出エジプト20：3、マタイ12：30）、などです。罪について説教することはきわめて難しい説教のひとつです。しかもひとつの面にかたよることなく、まんべんなく罪の性質の局面にふれて、会衆の必要にふれ、また満たし、チャレンジしていくことは至難のわざです。しかしそれを組織神学は助けてくれます。自分のレパートリーにはない新しい調理の方法を。この方法は卒業論文にも活用できると思います。まず関心のある領域を設定し、次にその領域の中からテーマとなる主題を固めていきます。そのプロセスを助けてくれるのが組織神学です。たとえば「罪」という領域に関心を抱き、次に「罪の性質」に主題を絞っていきます。そのときに、「罪の性質」に関する聖書個所の包括的な眺望を与えてくれるのが、また組織神学なのです。ここでは五つの代表的な個所が挙げられています。そして次にこれらの代表的な個所の聖書個所を主題にそって釈義していけばよいのです。五つの副題を掘り下げ、五つのシリーズ説教を準備していく感じで、ひとつの論文がまとめられていきます。そして、これらの五つの内容をもつ「罪の性質」に関する論文は、そのまま講壇へと運ばれてもよい説教への豊かな霊的資源となるのです。

組織神学は、種々の主題・副題についての体系的代表的聖句集です。そしてそれらを解釈する助けとして注解書があります。注解書は、すぐれた全巻ものをひとつもち、あとはパークレー、カルヴァン、内村、...など特色のあるものをそろえていくとよいでしょう。同じ内容の全巻ものは高いわりに無駄になることが多いようです。また関連聖句を調べるためにはコンコルダンス（聖書語句辞典）があります。最近私が重宝していますのは「Jバイブル1, 2, 3と聖書の達人」です。一度使ってみると手ばなすことはできません。

聖書原語のできる人は、聖書原書（ヘブル語旧約・ギリシャ語新約）、文法（片山、メイチェンのものなど）、そしてレキシコン（ヘブル語・ギリシャ語などの辞典類）も活用できます。聖書原語があまりできない人でも、最近できましたJバイブル2（ギリシャ語）、Jバイブル3（ヘブル語）があれば、単語の意味の確認などは簡単にできます。この時代の機器とソフトは、聖書原語を限りなく身近なものにしてくれたということができるよう。Jバイブル3（ヘブル語）では、ヘブル語の入門的学びもできるようになっています。

[1999年7月29日 22時34分23秒]

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson
Part 1. The Doing of Theology
第一章 神についての学び：第二項目 神学の方法

第一節 聖書の材料の収集 第二段落翻訳

使用される資料について注意深く考慮することは、この段階においてさえ重要なことである。たとえば、私たちは注解書の著者の立場を考慮すべきである。私たち少なくとも著者の神学的な見方について知っているべきである。その結果、私たちの一般的な見識と一致しない前提が知らないうちに取り入れられたりはしない。ここでの潜在的な問題は、私たちが進路調整のための道具を使用するときにかかるかもしれないそれのようである。たとえば、コンパスにおける小さな誤差は、私たちが長い距離を旅したとき、かけ離れた進路に進んでしまう結果となりうる。それだから、私たちの注釈の道具についての注意深い評価は重要である。

< 解説 by Aguro >

「注解書の著者の立場を考慮すべき」「注釈の道具についての注意深い評価」とあります。私が最初にこの問題を考えるようになりしたのは、学生時代にK G K（キリスト者学生会）に所属していた時のことです。導かれ、洗礼を受けたのはスウェーデン・バプテスト系オレプロ・ミッションの「日本福音教会」の西宮福音教会でした。穏健でバランスのとれたカルヴァン主義的なバプテストの流れでありつつ、穏健なホーリネス的強調や穏健なカリスマ的強調が特徴の群れでした。

大学内のK G Kの聖書研究会において、また交わりにおいて、ときどき「カリスマ運動」のことが話題となり、意見が分かれることがあり、悲しい思いをしました。同じ主にある兄弟姉妹でありますのに、「聖霊経験や理解」において、なぜこのような意見の相違があるのかと悩みました。そのような中で私はいつも「共通理解」があるはずだと考え、多くの書籍を世界各地から取り寄せて読みあさりました。

それらの中で一番参考になった書籍のひとつにR・H・カルペッパー「カリスマ運動を考える」というのがありました。そしてその書籍の特徴は、参考文献表に記されてありますように、「ペンテコステ派、カトリックの中のペンテコステ主義、プロテスタントの中のペンテコステ主義、ペンテコステ派ではないが好意的、非ペンテコステ派」と五つの立場の考え方を公平に扱いながら「共通理解」を探求している書籍でした。

ひとつの個所の聖書解釈においても、立場の相違によって多くの解釈が生まれてきていることを知りました。また聖書解釈者自身のもっている「世界観」によってもかなりの解釈の幅があることを知りました。

所属している教派や教会の立場や理解への忠実さが強く求められる場合もあります。それで聖書の啓示が許容している範囲内の多様性を尊重しあうことが大切だと思うようになりました。

共立基督教研究所で「聖霊論」についての論文に取り組みましたとき、超教派的な共通理解を提示している「J・D・G・Dunnの「イエスと御霊」」の聖書解釈の方法を扱いました。ルネ・パディリアの指摘していた「解釈学的螺旋」の方法とレヴィ＝ストロースの「構造主義」的な洞察にみられる手法が参考になるとの指摘でした。ただ、「自分の「ポジティブ」な確信の主張だけではなく、論文においては『J・D・G・Dunnの「イエスと御霊」』についての「ネガティブ」な評価も記述することが論文としての評価を高めます」との宇田師の助言に従い、いくつかのネガティブな書評をも記述しました。それはA T A 修士論文「J・D・G・Dunnの「イエスと御霊」についての一考察」の本論、第1章「福音派の聖霊論の課題におけるダンの『イエスと御霊』」の「注23：J・J・Davisの『福音主義神学の基盤』からの抜粋であり、D・G・ブローシュの『福音主義神学の本質』からの抜粋」です。論文においてだけでなく、議論のあるひとつの主題については、一方だけの見方だけではなく、包括的な見方を学ぶ

必要があると思います。そして「包括的な視野を保ちつつ、私は所属は教派・教会との関連においてこういう立場をとります。」という考え方が大切だと思います。エリクソンの組織神学はそのことを教えてくれています。

もちろん、エリクソンがここで語っていません事柄は、「聖霊論」の範疇の事柄ではなく、「聖書論」の範疇のことが焦点になっていると思います。聖書論につきましては、第3章から7章までにおいて詳しく扱うこととなります。

上記の私の論文につきましては、私のホームページの中に掲載してありますので、関心のある方はお読みください。

[1999年7月29日 22時35分43秒]

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson
Part 1. The Doing of Theology
第一章 神についての学び：第二項目 神学の方法
第一節 聖書の材料の収集
第三段落翻訳

この点において、重大な考慮は著者が彼の特別な聴衆に語っているものを正確に確定することである。これは聖書の背景についての研究を意味するだろう。その結果私たちは、いわば対話におけるもうひとりのパートナーを理解する。聖書箇所を読むことは、電話の会話の片方を聞いているようなものである。たとえば、パウロ特別なグループに書いた。そして彼らが保持していた立場に関係した。私たちがそれらの立場をよく知らないなら、パウロの意味を確定することは困難である。

< 解説 by Aguro >

「電話の会話の片方を聞いているようなもの」とは、うまい表現です。私たちは、そのことばを聞きますが、そのことばは明確な対象に語られていることばなのです。ときどきは、その相手について知らなければ、話されていることの真の意味が理解されず、誤解を生む場合すらあります。例えば、特に親しい友人の場合、冗談めいた会話の中で、「死ね」とか「殺すぞ」とかという言葉をはいたとして、ふたり間柄を知らない人が、そのところだけを取り上げるとしたら、大変な「脅迫電話」をしていたということになるかも知れません。

そのような誤解、すなわち誤った解釈を避けるために、ローザンヌ世界伝道会議の継続会議のひとつとして開かれましたウィローバンク会議で最も影響力のあった論文、ルネ・パディリア「解釈学と文化 - 神学的視点」を紹介したいと思います。私のATA修士論文の中に抜粋・引用して記述したものです。

「解釈学と文化 - 神学的視点」(『地の深みまで - キリスト教と文化序説 -』山田耕太訳、すぐ書房、1987) pp 109-111

聖書解釈の方法には、大別して三つの方法がある。それを紹介しておこう。

第1に「もっとも一般的な方法は、『直観的』アプローチと呼ばれる。

・・・ハドソン・テイラーのヨハネ 7:37の解釈において、彼は『霊的な秘密』を明らかにした。この解釈の中で、ハドソン・テイラーは、このテキストの原初の背景(1世紀のエルサレムの仮庵の祭り)を探求せず、最初の聴衆や読者がこれをどう理解したかも問わなかった。彼は自分の読み方が、現代の

状況やものの見方によってどう影響されるかも問わなかった。その代わり、聖書が母国語に訳されている範囲内で古代のテキストに直接近づける、多くのキリスト者のひとりとして読んだ。このアプローチは、個人の直接的適用を強調しがちであるが、古典的な注解書、現代の大衆説教、霊想書に数多くその例が見出される。」

この解釈方法は、ペンテコステ系統とホーリネス系統の教派によくみられる。ペンテコステ系統とホーリネス系統の教派は、「教義・信条・儀式・学問より生活・実践・体験の重視、頭の宗教に対して心情の宗教・生活の宗教」が強調される傾向がある。それゆえ、福音派における聖霊論の「教派性と公同性」の課題において、教派の体質的特徴を濾過することが大切である。濾過するための十分な手立て - 神学的パースペクティブ、歴史的判断力、宗教社会学的分析能力 - が必要とされている。

第2に、「『科学的』アプローチがある。これは、前者と対照的で、文学批評、歴史学、人類学、言語学などの成果を用い、大多数の聖書学者によって用いられ、(たんなる聖書読解と対照的に)まじめな聖書研究に関心のある、教育を受けたキリスト者によって受け入れられている。この方法は、原初のテキストの意味を理解する点においては申し分ないが、テキストを個人に適用する点において(とくに学者が自分に個人的に適用する点において)弱点がある。」

この解釈方法は、改革派系統の教派によくみられる。いわゆる「歴史的・文法的解釈」であり、聖書の言語における客観的意味を読み取る訓練が大切にされている。

「両者の方法論の重大な問題点は、現代の社会的、経済的、政治的要因や、ほかの文化的な影響力が、いかに解釈の過程で影響を与えるかについて考慮しない点に見られる。」このことが、福音派の聖霊論における教派性と公同性における課題に取り組む上で、見落されてはならない不可欠な視点である。福音派におけるさまざまな研究会での論議や日本福音主義神学会における議論が、それぞれの立場の主張と相互理解のレベルにとどまり、共通概念の形成により公同性の深化へと進んでいかないのは、この視点がブラインド・スポットになっているからではないだろうか。

「第3のアプローチは『文化脈化』のアプローチである。直観的方法や科学的方法の長所に加えて、文化脈化の方法は現代の読者が、テキストに《耳を傾けて》理解する過程で、現代世界のもつ役割に関する理解をつけ加える。

神のことは、特定の歴史的文脈の中で、すなわち、ヘブライ世界とギリシア・ローマ世界の中で生まれた。神のことは、実際に、あらゆる特定の文化様式の中で、ある特別の歴史的状況の中に『肉体』をとることによってはじめて理解され、また適用される。解釈学は、原初の歴史的状況から、現代の読者の歴史的状況に伝達内容を伝え、最初の聴衆や読者に引き起こしたのとおなじインパクトを、現代の読者に与えるという課題に挑戦する。」福音派の聖霊論の課題において、私たちが注目する解釈方法は、この「文化脈化のアプローチ」である。

私は、論文のために、ルネ・パディリアの論文を引用し再構成しました。しかし、このような聖書解釈における課題は、聖霊論のみではなく、神学のすべての主題において、きちんと捉えられていかなければならない課題と思います。

=====
[1999年7月29日 22時36分40秒]

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson

Part 1. The Doing of Theology
第一章 神についての学び：第二項目 神学の方法
第一節 聖書の材料の収集
第四段落翻訳

そのような聖書の研究はあらゆる種類の聖書資料の研究を意味する。いくつかの場合において、私たちは言葉の研究をするだろう。たとえば、ギリシャ語の名詞ピスティスや動詞ピスチューオーのすべての出所の研究によって「信仰」の意味を特定するかもしれない。著者がある特定の主題を直接的なかたちにおいて語りかけている聖書の教えの個所を研究することは有益であることをしばしば証明するだろう。それらの個所の特別な意図は教えることであるゆえに、教理的な重要性はしばしば大変明らかである。さらに難しいのは、しかしまたきわめて重要なのは、物語の個所である。ここで私たちは、神学的な事柄を論述することよりむしろ、神と人間の行為についての記述をもっている。それらの個所はしばしば教理的な真理の例証として仕える。いくつかの場合には、著者はまた教理的意味が明白である釈義とか説明を与える。

< 解説 by Aguro >

この段落における要点は、「言葉の研究」、「教えの個所」、「物語の個所」の三つです。1. 「ことばの研究」につきましては、聖書辞典とかキリスト教辞典において、ひとつのことばを引きますと「語義」の検討がなされている場合がしばしばあるので、ひとつのことばの立体的な意味を確認することができます。今年は娘が中学3年生なので、高校受験の年にあたります。それで英語の特訓を助けています。不明瞭な単語のひとつひとつについて、辞書をひくことを教えています。そしてその語がどのような文脈でどのような意味をもつ語句なのかを確認するように指導しているのです。そのような地道な努力の結果として、ひとつの語句についての立体的なニュアンスを自分のものにできると思います。

2. 「教えの個所」と3. 「物語りの個所」につきましては、前者が教理を形成していく上で幹となる役割、後者は教理形成のプロセスにおいて補完的役割を担うことが指摘されています。「物語りの個所」を幹にして教理を形成していこうとしますと、体系的な神学を構築していくことができません。また「教えの個所」だけで教理を形成していこうとしますと、骨だけの教えとなり肉付きの悪いものとなります。信仰義認の教理におきましては、アブラハムの生涯の物語りの例証が必要ですし、贖いの教理にはレビ記の犠牲の儀礼の例証が有効です。

論文作成にふれますと、扱おうとしている主題や副主題などにおける用語の語義を点検しておくこと、また聖書の材料を扱うときには「教えの個所」と「物語りの個所」の役割をきちんと念頭においておくことが必要です。

=====

[1999年7月29日 22時37分36秒]

記事タイトル: 第二節 聖書の材料の整理

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson

Part 1. The Doing of Theology
第一章 神についての学び：第二項目 神学の方法
第二節 聖書の材料の整理
第一段落翻訳

聖書の著者が相違した状況において、ひとつの与えられた主題について何を語っているかを学ぶことは重要なことである。しかしながら、教理とは、パウロやルカまたヨハネが何を語ったのかについての表現以上のものである。そしてだから私たちはそれらの証言をある種の一貫した全体にまとめて描かねばならない。ここにおいて、神学者は他の諸学問の手順からまったく異なった手順に導かれている。たとえば、心理学において、人は通常与えられた思想の諸学派の心理学者の間の同意のポイントをまず最初にみる。そしてそれから、明白な相違の有無が事実上の不同意であるのかを確かめる。

< 解説 by Aguro >

神学者は、多数の著者の背後に唯一の著作者であります神を見ていますが、一般の学問の世界においては、多種多様な説がある場合、共通する主張の部分を考慮しますが、彼らは多様な学者の存在を前提にしているのです。ですから多数の著者における相違点を見出した場合、それをどのように見ていくかという視点において大きな相違があると思います。それを明日みていきましょう。

=====

[1999年7月29日 22時38分54秒]

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson
Part 1. The Doing of Theology
第一章 神についての学び：第二項目 神学の方法
第二節 聖書の材料の整理
第二段落翻訳

もちろんこの真摯な取り組みにおいては、いくつかの聖書の材料や証言の間にある一致と首尾一貫性を仮定している。それは私たちを特異な強調や意味のニュアンスにおいて盲目にさせるべきではないけれども、それは私たちが不一致とよりも一致を探求するであろうということを意味している。ある新約聖書学者がそれを書きとめているように「私たちは[マタイ、マルコ、ルカ]の共観福音書が相違している5%の材料を、他の周辺のなものよりもむしろ明確な一致のある95%の光のうちに解釈する。」

< 解説 by Aguro >

ここでの要点は、「首尾一貫性を仮定」、それは聖書の真の著者が神であるというプロテスタント福音派の確信であります。しかし「盲目にさせるべきではない」というのは、なにもかにも目をつぶり、無視したり読み込みをしたりすることではありません。そのような行為は批判者につけいるすきを与えることになりすし、また私たちの聖書解釈の健全性を自ら放棄することにもつながります。ではそこにおける正しい態度とはいかなるものでしょうか。

それは宗教改革の原則でもあります”聖書が聖書を解釈する”という原則です。これは一般に”聖書の類比”と呼ばれている事柄で「聖書解釈の無謬

の規準は、聖書自身である。従って、どの聖句も真の完全な意味について疑問のある場合も、もっと明らかに語る他の聖書箇所によって探求し、知らなければならぬ。(ウエストミンスター信仰告白一九) このことを「明確な一致のある95%」の光の下で「相違している5%の材料」を解釈すると表現されているのだと思います。

ウエストミンスター信仰告白の聖書論は、きわめてすぐれた内容となっています。新教出版社からそれに関連していますシリーズも出ていますので、ぜひ一度読んでみてください。

[1999年7月29日 22時41分14秒]

記事タイトル: 第三節 聖書の教えの意味の分析

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson
Part 1. The Doing of Theology
第一章 神についての学び: 第二項目 神学の方法
第三節 聖書の教えの意味の分析
第一段落翻訳

教理的な材料が一貫性のある全体において集められてきたとき、私たちはそれが本当に何を意味しているのかを尋ねなければならぬ。ここで問題の部分は、私たちが聖書の箇所今日の意味を読み込まないということを確認することである。私たちの会話のほとんどが長らく聖書の特別な解釈に親しんできた人々とともにあるとき、再生することのような概念が同じ方法ですべての人々に理解されるであろうと単純に仮定することは、また可能である。

< 解説 by Aguro >

1世紀において「それが本当に何を意味しているのか」を見きわめるために、「聖書の箇所今日の意味を読み込まない」という聖書解釈の原則を守ることが必要とされています。そのことが明確に認識されていない場合、無意識のうちに「同じ方法ですべての人々に理解されるであろうと単純に仮定」されて、聖書解釈や説教がなされてしまうこととなります。

この点においては、すでに先日「聖書解釈学」の視点からルネ・パディリアの聖書解釈理解「直観的聖書解釈、科学的聖書解釈、文化脈的聖書解釈」に触れました。今日は、「聖書神学」の視点から「宗教史学派の聖書解釈法」において教えられる点を見ていきましょう。

宗教史学派においては「自分の西洋的な、二十世紀的な思考を脱皮して、過去の感情や思考パターンと一体となることが学的理想となりました。こうして聖書の時代と現代の間に横たわる『世紀の隔たり』が強調されました。こうした状況の中で、新しい課題として持ち上がってきたのは、聖書的思惟の記述的研究です。そこでは各時代のイデオロギーは、それぞれに注意深く記述に値するものとして十分に注意が払われました。また箇条やメッセージが、聖書の書き手や読み手にとって、どのように機能したか、どのような意

味をもったかななどの課題が、より強い興味の対象となりました。...宗教史学派が、我々の時代と聖書の時代の裂け目(世紀の隔たり)を徹底的に広げた事実なくして、現代の聖書神学は全く考えられなくなりました。その結果、課題は二つの時制に分けられることとなりました。1世紀において『何を意味したか』と、二十世紀において『何を意味しているか』です。」

私たちの課題であります「聖書の教えの意味の分析」において、この「1世紀において『何を意味したか』と、二十世紀において『何を意味しているか』」を意識的に明確に分けて認識することが大切です。

[1999年7月29日 22時42分30秒]

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson
Part 1. The Doing of Theology
第一章 神についての学び：第二項目 神学の方法
第三節 聖書の教えの意味の分析
第二段落翻訳

それゆえ神学者はひるむことなくその問い「この個所は本当に何を意味しているのか」に突き進まなければならない。というのはもし聖書の概念が今日の形式に正確に翻訳されるべきであるなら、それらが正しく理解されることが重要である。もしそれらが正しく理解されなかったのであるならば、不正確さが混ざりこんでいるので、そのプロセスの後者においてさらにおおきな不正確が生まれてくることになるであろう。通常言われているように、もし話し手の知性においてなにかははっきりしていないものがあるならば、聴衆の知性においては決して明確なものとはならないだろう。同様に釈義に関して神学者の知性において明確でないならば、今度は釈義の結果を他の人々に伝達しようとする説教者としての神学者の知性においてそれははっきりとしたものとはならないであろう。

< 解説 by Aguro >

聖書個所が「正しく理解される」ことの大切さが強調されています。私たち現場で伝道・牧会の奉仕にたずさわる者は、なかなか聖書個所の客観的な研究に時間がとれないという面があります。そこで聖書釈義のすぐれた注解書をそろえていくことが大切になってきます。費用がいろいろとかかりますので、将来的にはそれらの書籍がホームページに掲載されて安価な私たちで提供されるようになればと思います。手身近なところでは、H・H・ハーレイの聖書ハンドブックなどはいいと思います。信仰の初期にそれを片手に聖書を丁寧に通読しました。聖書を客観的に理解するのに大変役に立ちました。そして今日まで約25年間、メッセージの準備のときに簡単に前後の背景を確認しておくと言教の流れの中で、今までに聖書学校において学んだことも自由に引き出しつつ語ることができるようになります。

学生時代に救われ、大学のキャンパスの中でマルコによる福音書の伝道的聖書研究の集会を毎週持ちました。クリスチャンが交代で準備するのですが、そこでよく教えられたことは、「事実」「解釈」「適用」の順序でした。聖書の記述が客観的な事実であるという現実、いわゆる「生活の座」に入っていくことは大きな感動であったことを思い起こします。

[1999年7月29日 22時43分48秒]

記事タイトル: 第四節 歴史的取り扱いの吟味

[書き込み欄へ](#) [ヘルプ](#)

お名前: 安黒務

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson
Part 1. The Doing of Theology
第一章 神についての学び: 第二項目 神学の方法
第四節 歴史的取り扱いの吟味
第一段落翻訳

神学の道具のひとつは、教会史について研究することである。ここで私たちはひとつの特別な教理が過去においてどのように見られてきたかという脈絡において私たち自身の解釈を位置付けることができる。ここでの目的は、単に過去において多様な観点において主張されてきたものの最小の共通分母を公式化することではない。そうではなく、しばしば私たちの解釈や構成が初期のものと比較されることによって、私たちが理解するのを助けることである。それゆえ私たちはしばしば、同様の見方の歴史的な結果を見ることによって最近の見方の意味合いについて話すことができる。

< 解説 by Aguro >

歴史的取り扱いの吟味ということですが、このことの説明のために最近私が取り組みました小論文についてお話ししたいと思います。すでにホームページにおいて何回も記述してきましたように、私はスウェーデン・バプテスト系の流れの「日本福音教会」という群れに属しています。私が学生時代にクリスチャンになりましたとき、所属する群れがいかなるものであるかについてあまり関心がありませんでした。ただ「イエス・キリスト」を個人的・人格的に信じ受け入れたというだけでありました。

学生時代、大学のキャンパス内の聖書研究同好会ポプラ（大学紛争の時期に、現在上郡福音教会牧師の豊村師が創設された祈りと聖書の学びのための同好会）には多様な教派からの学生クリスチャンが出席していました。そして時々「安黒さんの教会はどのような教派なのですか。」と尋ねられました。私はしばしばその質問に窮し、私の所属している群れは一体どのような教派なのだろうと自問するようになっていきました。

ある意味で、19歳のときにクリスチャンになってから現在の45歳の間の25年間は、自らの信仰のアイデンティティ探求の歩みであったと思います。その助けとなった書籍をリストアップしますと、最初はH. H. ハーレイの「聖書ハンドブック」による丁寧な聖書通読でした。自分の信じている信仰内容をおおむね把握することができました。大地に根をはった樹木のように、神のことばである聖書に根をはった信仰からくる自信のようなものが芽生えてきました。次にはウォッチマン・ニーの「キリスト者の標準」でした。この書籍から「十字架と聖霊」のクリスチャン生活における意味について、特に「義認と聖化」について明解な理解ができました。さらに私たちの

群れは北欧の諸教派が聖霊刷新運動でありますペンテコステ・カリスマ運動にオープンでありますように、スウェーデン・バプテスト系でありつつ、聖霊刷新運動に積極的な群れでありました。私たちの群れ「日本福音教会」においても、それらの聖霊経験にオープンであり積極的でありました。私もクリスチャンになって一年くらいしてから、梅田の扇町教会にて「聖霊カリスマ・セミナー」が開催されるということで出席しました。アメリカとカナダからチームが来ていました。聖霊と聖霊経験についての穏健で丁寧なセミナー内容でした。そして終わりに祈りのときがありました。そのときに使徒行伝二章にあるのと同様な経験を目撃しました。そのときから、神さまはみことばだけではなく、聖霊の経験も今日提供しておられるのだと分かりました。そして私も同様の経験をしました。ただ、大学にある超教派の交わりにおいては、その理解に微妙な相違がありました。いつも親しくしている同じクリスチャンであるのに、どうしてこのような軋轢が存在するのだろうかと心を痛めました。そのような経験が、世界各地から聖霊とその経験について書かれた書籍を収集する契機となりました。何百冊という書籍を収集し学んできました。一番参考になった書籍は、R・H・カルペッパーの「カリスマ運動を考える」でした。カリスマとアンチ・カリスマの両方の極論を記述した書籍もある中で、公平・中立を貫いた良書と思います。長くなりすぎますので、このへんでまとめたいと思います。

要するに、歴史的に「私たち自身の解釈を位置付ける」ことの大切さ、しかし「最小の共通分母を公式化」することではなく、「解釈や構成が初期のものと比較」することによって、私たちの「解釈」についての理解を深めることが大切であるということです。

私の小論文とは、所属団体であります「日本福音教会」のルーツとアイデンティティについて「安黒試論」としてまとめたものです。義認と聖化と聖霊に関しては、我喜屋師、高橋師、大川師、福野師などが短い原稿を書かれてきましたが、包括的な神学の視野におけるJECの位置付けについては、いままでJECの中ではそのような研究論文は書かれたことがありませんでしたので、JECのサポートも受けて共立基督教研究所で丸三年学ばせていただいた者としてお礼の意味もこめましてまとめてみました。テーマは「JEC（日本福音教会）の神学的座標軸を模索する - 過去・現在・未来を眺望して - 」です。その中で私の取り組みましたひとつのことは、上記の「十字架と聖霊」の理解、そして「カリスマ運動」の理解は、包括的な歴史神学の視点からはどのように位置付けられるのだろうか、ということです。結論としましては、前者は救済論の領域に、後者は聖霊論の領域の中の特に賜物論の領域に、神さまが解釈と適用の光を注がれたということです。ただ、神さまの啓示の光とみわざとは、組織神学の視点からいいますと、「聖書論・神論・人間論・キリスト論・聖霊論・救済論・教会論・終末論」の全般にわたっていますから、私たちの視野をその一部の領域にせばめてしまう危険には注意が必要ということです。神さまは次の時代に別の領域に、解釈と適用の光を注がれるかもしれないわけですから。

この小論文「JEC（日本福音教会）の神学的座標軸を模索する - 過去・現在・未来を眺望して - 」に関心のある方は、来年五月に刊行されますJEC（日本福音教会）宣教50周年記念誌をお求めください。またその時期には案内させていただきます。

=====

[1999年7月29日 22時47分5秒]

お名前: 安黒務

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson
Part 1. The Doing of Theology
第一章 神についての学び：第二項目 神学の方法
第四節 歴史的取り扱いの吟味
第二段落翻訳

歴史神学の学びからのもうひとつの益は、他の神学者たちがどのようにそれをしたのかを観察することによって、私たちが神学をすることを学ぶということである。私たちが、アウグスチヌスやトマス・アクィナスは彼らの時代の特別な状況にキリスト教のメッセージの表現を適用したその方法を見る時、私たちは私たちの時代のために類似する何かをすることを学ぶかもしれない。

< 解説 by Aguro >

「歴史的な取り扱いの吟味」ということで、ふたつのことを思い起こします。ひとつは英国の新約学者である J. D. G. ダンの「新約学の新しい視点」の中の文章「プロテスタント側のパリサイ派やラビのユダヤ教に関する研究の視点は、パウロの上に二重写しにされたルターの内省的な良心の探求と、パウロの論敵のうえに二重写しにされた中世教会の救済理解、という宗教改革の影響に色づけられてきたことである。」と聖書の客観的意味の探求に力を注いだ宗教改革者たちでありましたが、彼らは同時に時代の子であり、ルター自身の「内省的」状況と時代状況としての「カトリックとの闘争」をパウロの論敵の上に重ね合わせて解釈していったことが、一世紀の現実とのギャップを招いていると指摘しています。

ルネ・パディリアの三つの聖書解釈方法において指摘したことです。解釈者の「世界観」と「時代状況」というものがいかに聖書解釈に深く影響しているかが教えられます。

聖書解釈学を学んだとき、著名な神学者や説教者たちがそれぞれの時代状況とその人生の展開の中で、どのように聖書を解釈していったかを学びました。それぞれの聖書解釈に特徴があり、特色があります。それらを学ぶことは私たちの聖書解釈の助けとなります。今日の宣教における最大の課題のひとつは、私たちが聖書をどのように解釈し、それを私たちの時代の私たちの生活にどのように適用するのかということなのです。

=====

[1999年7月29日 22時48分11秒]

記事タイトル: 第五節 教理の本質のみきわめ

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson
Part 1. The Doing of Theology
第一章 神についての学び：第二項目 神学の方法
第五節 教理の本質のみきわめ
第一段落翻訳

聖書の教えが特別な状況下で記述されたこと、そして私たちの今日の文化状況がある点において聖書記者の文化状況とかなり異なっているということ

に留意するとき、私たちは私たちが単に同じ形式において聖書のメッセージを再表現すればよいというものではないと確信するに違いない。私たちはすべてのその特別な表現の様式の背後に横たわっているメッセージを発見しなければならない。たとえば私たちは申命記とローマ人への手紙において見出される救いについての共通の真理を確信しなければならない。もし私たちがこのことに失敗するならば、ふたつの事柄のうちのひとつのことが起こってくる。私たちは教えについての特別な様式を保持することを主張するかもしれない。たとえば私たちは旧約聖書の犠牲のシステムを保持することを主張するかもしれない。もう一方の危険は、メッセージをのべることを試みるプロセスにおいて、私たちがそれを変えてしまうので、結果的にそれは異なった「種」というよりもむしろ異なった「属」とされてしまう。犠牲のシステムの例において、永遠かつ不変であるものは犠牲の形式ではなく、人類の罪のためには身代わりの犠牲が必須であるという真理なのである。今日的な表現の形式のうちに永遠の真理を特定するこの任務はきわめて重要なので、私たちはこの主題の次の章の大部分をあてることになるだろう。

< 解説 by Aguro >

”species” と ”genus” は、生物学における分類単位の用語であり、”genus” は「属」の意味であり、”species” は「種」の意味です。これだけでは意味が分からないので、少し生物学における分類方法をみていきましょう。

「生物学者は、種という分類概念を基本にすえて個々の生物を分類する。種は、現実存在するただひとつの階級で、これより上位の階級は、種を観念的にグループ分けしたものにすぎない。同じ種に属する生物は、数多くの重要な特徴について、類似した点をもっている。さらに有性生殖をおこなう生物の場合、同じ種に属する個体どうしが交配したときだけ、生殖可能な子が生まれる。

たがいに交配をしない複数の種が重要な形質を共有し、明らかに類縁関係にある場合、これらの種は1つの「属」に分類される。このときそれぞれの種には、二命名法によって2語の名がつけられる。最初の語が属名、2番目の語は種小名である。種小名としては、種の特徴を説明したり、関係する地名などをしめす形容詞がもちいられることが多い。この命名法は1758年、スウェーデンの博物学者で、近代分類学の創始者であるリンネによって確立された。リンネは生物を命名する際、当時の学術用語につかわれていたラテン語をもちいた。人間の属名をホモ(人)、種名をホモ・サピエンス(賢明な人)と命名した。

分類体系をつくるにあたり、1つまたは複数の「属」は、これより上位の階級である「科」に、「科」は「目」にグループ分けされる。さらに、「目」は「綱」に、「綱」は「門」に、「門」は「界」にそれぞれグループ分けされる。これら7つの主要な階級のそれぞれのレベルにおける生物の分類群を、分類単位とよぶ。それぞれの分類単位は、それを構成する下位のすべての分類単位が共有する重要な形質を、包括的に説明するように定義される。」

なにか継続神学教育課程のカリキュラムの分類の原理と似ていると思います。「結果的にそれは異なった種というよりもむしろ異なった属とされてしまう。」の意味は、「人間の属名をホモ(人)、種名をホモ・サピエンス(賢明な人)」と分類されていますように、「種」つまり同質である人間における多様性という次元の変化の問題ではなく、「属」つまり人間とは別個の存在に変化してしまう次元の問題であるとの指摘です。

エリクソンの指摘しているポイントは、「犠牲のシステムの例において、永遠かつ不変であるものは”犠牲の形式”ではなく、人類の”罪のためには

身代わりの犠牲が必須”というメッセージです。そして「今日的な表現の形式」のうちに聖書にある”不変のメッセージ”を表現していくことです。要するに、メッセージを変えてしまうことでも、旧約の形式を永遠に保持することでもないのです。このあたりことは、第二章「キリスト教のメッセージを今日的に表現していくこと」において、詳しく扱っていきます。

[1999年7月30日 13時20分28秒]

記事タイトル: 第六節 聖書以外の資料からの光

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson
Part 1. The Doing of Theology
第一章 神についての学び：第二項目 神学の方法
第六節 聖書以外の資料からの光
第一段落翻訳

私たちははじめに、聖書が私たちの教理を構築するさいの第一義的資料であると述べた。しかるにそれは主要な資料ではあるけれども、しかしながら唯一の資料ではない。一般的な意味において、神はご自身を神の創造と人間の歴史において啓示されている。その啓示の研究は、聖書において私たちのために保存されている特別啓示をさらに十分なかたちで理解するための助けとなるであろう。

< 解説 by Aguro >

私たちは”学問”と”信仰”とか、”科学”と”キリスト教”とかというように、対比して、つまりかなり対立するものとして考える傾向があるのではないのでしょうか。それが伝道熱心な教会が神学を軽視することにもつながっていると思われます。実際にアメリカのリバイバリズムにおいては、反知性的な傾向が顕著でありました。また今世紀のリベラリズムと福音主義の葛藤においては、前者が”学問的”傾向をおび、後者は”伝道的”傾向をおびてきたようです。

しかし今日、福音派の神学校においても”宣教の情熱”と”神学の論理”の両輪が重んじられるようになっていきますし、福音派系のミッション・スクールにおいても”学問”と”信仰”とか、”科学”と”キリスト教”というテーマが調和とバランスの視野をもって新しい次元で探求されているように思います。クリスチャニティ・トゥデイ誌に、アメリカでミッション・スクールに非常な人気が集まっているという記事が掲載されてありました。混迷する社会の中で、明確なキリスト教倫理にたつ教育が見直されていることと、ミッション・スクール側におけるキリスト教信仰にたちつつ学的なレベルアップへの懸命な努力がされていることと関係があるようです。私たちの日本のミッション・スクールや神学校においても、同様の努力が必要な時代にさしかかっていると思われます。

「神はご自身を神の創造と人間の歴史において啓示されている。」とありますが、この被造物世界とその中の主人公である人間について、いろんなこ

とを研究するのが ” 学問の世界 ” ではないでしょうか。基本的に神がその靈感によって導かれて書かせられた ” 聖書の記事 ” と神のそのみちからによって創造され保持し、摂理のうちに導かれている ” 被造物世界の現象 ” とは、両者が完全なかたちで理解されるとしたら、完全に調和するはずで

す。 ” 学問 ” と ” 信仰 ” と、 ” 科学 ” と ” キリスト教 ” は、そのような意味と視野において調和的に理解され、相互補完的な役割を担うべきなのです。

[1999年7月31日 15時18分5秒]

"Introducing Christian Doctrine" by Millard.J.Erickson

Part 1. The Doing of Theology

第一章 神についての学び：第二項目 神学の方法

第六節 聖書以外の資料からの光

第二段落翻訳

ひとつの例として、人間における神の像の問題がある。聖書は私たちに、神は人間を神ご自身の像と似姿に創造されたと教えている。その性質についての一般的な示唆が存在するけれども、私たちは聖書から特に神の像が何を意味しているかを決定することができない。他方で、行動科学は私たちが創造物のあらゆる種類の中において人間についてユニークなものは何であるかを特定することができるように、私たちに神の像についてのいくつかの洞察を与える。

< 解説 by Aguro >

私は毎朝、エリクソンの神学書を開き、ひとつの段落を翻訳し、それを瞑想し、教えられること、考えさせられること、学ばせられることなどを導かれるままに書き綴ることをもって一日をはじめます。長年生活習慣の一部でありましたあの ” 静思の時 ” の組織神学版かなと思わせられています。いわば ” 神学的瞑想 ” をもって一日をはじめるということでしょうか。あらためて勉強をするという感じではなく、呼吸する空気を神学的素養を含んだものにする。毎日の知らず知らずの積み重ねのうちに、神学的成長・成熟をはかるといった感じかと思えます。聖書学校を卒業し、宣教と牧会の現場に出てしまえば自然な生活のリズムのうちに継続的な神学の学びを、 ” 軽い荷 ” という感じで続けていくことができます。

信仰と学問、キリスト教と科学の相互補完的な役割については、前回でも言及させていただきました。ある神学者は組織神学について「教会に固有な、神について語ることの内容に関する、キリスト教会の学問的自己吟味」と定義づけています。

[1999年8月2日 13時37分42秒]

"Introducing Christian Doctrine" by Millard.J.Erickson

Part 1. The Doing of Theology

第一章 神についての学び：第二項目 神学の方法

第六節 聖書以外の資料からの光
第三段落翻訳

聖書解釈の歴史において、事実いくつかの非聖書的学問は、ときどきは聖書釈義や神学者たちの抵抗があつたにもかかわらず、私たちの神学的知識に貢献してきたということに留意することは価値あることである。たとえば、創世記1章に言及されている一日は24時間、より長い期間、もしくは非時間的な概念とさえ考えられるべきであるかどうかを決定すべき学者としての努力は、聖書釈義に制限されてこなかった。自然科学、特に地質学は、神が何をなされたのかという私たちの知識に貢献してきた。

< 解説 by Aguro >

「科学とキリスト教」の關係を取り扱った良書として、東京基督教大学の稲垣久和教授の「進化論を斬る - 科学とキリスト教 - 」があります。項目のみを紹介しますと、

「1．近代科学の方法論、2．生物進化の仮説、3．物理科学からみた生物、4．進化論と哲学、5．進化論と現代」という構成になっています。稲垣師の他の著書としましては、「大嘗祭とキリスト者」があり、それをテキストとして「比較宗教学」を教えています。私が稲垣師の著作を愛好しますのは、福音派の神学校においては「学問とキリスト教」の關係を非常に乱暴なかたちで扱っている場合が多く、またリベラルな神学校では「聖書」を大変乱暴に扱っているケースが目立つように思います。そのような中で、福音的な立場にたちつつ「学問とキリスト教」の關係を真摯に取り扱っておられるという点からです。両極端を排しつつ、真摯な学的努力を続ける者でありたいと思います。

[1999年8月10日 13時26分39秒]

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson
Part 1. The Doing of Theology
第一章 神についての学び：第一項目 神学の性質
第六節 聖書以外の資料からの光
第四段落翻訳

しかしながら私たちは、聖書が私たちの努力における第一の權威であることを確かにする必要がある。また私たちは、私たちが聖書と非聖書的材料の間の關係について時期尚早な結論を引き出さないことを確かにする必要がある。完全に理解されたときの聖書と完全に理解されたときの創造とは、互いに完全に調和している。しかし私たちはどちらの事柄についても完全な理解を手にしていない。したがって私たちの両者の取り扱いにおいてはときどきある緊張があるということも、もっともなことである。

< 解説 by Aguro >

「完全に理解されたときの聖書と完全に理解されたときの創造とは、互いに完全に調和している。」この「聖書」と「創造」の關係の理解は、聖書を神のことばと信じ、またこの世界を神によって創造された世界と信じる福音的なクリスチャンの確信です。この理解が、信仰と学問、キリスト教と科学の關係の理解の底辺にあるものです。

[1999年8月10日 13時27分53秒]

記事タイトル: 第七節 教理の今日的表現

E-Mail Lectures on Internet for ICI Mailing-list

[ICI] (icd.0101010701) Daily Systematic Theology by Aguro

こんにちは、一宮基督教研究所の安黒務です。ICIメーリングリストにおいては、組織神学の”世界的基準書”と高い評価を受けているエリクソンの「キリスト教神学」の簡潔版である「キリスト教教理入門」をはじめから毎日一段落ずつ学んでいます。それでは今日は下記の箇所を学びましょう。

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson

Part 1. The Doing of Theology

第一章 神についての学び：第一項目 神学の性質

第七節 教理の今日的表現

第一段落翻訳

私たちが教理の永続的な本質とか普遍的な内容を決定するやいなや、私たちは私たちの時代の人々に合理的で受け入れやすい様式においてそれを表現しなければならない。これがなされるかもしれない方法のひとつは、まずパウル・ティリッヒによって公式化された。そしてそれは呼応の方法”Method of Correlation”として知られている。最初のステップは、私たちの時代に問いかけられている問題は何なのかと尋ねられるべきである。ここで、私たちは単に個々人が直面する直接的な存在論的諸問題を意味するだけではなく、文化一般がリアリティを観察する包括的な見方をも意味する。それからそれらの問いは私たちのキリスト教のメッセージの提示の出発点となる。確かに私たちは非キリスト教世界をすべての協議事項を設定するよう許容すべきではない。というのは多くの場合において、もっとも重要な問いの存在を尋ねることも、また認めることすらしないかもしれない。それにもかかわらず、尋ねられるべき問いが何であるか確認することはしばしば助けとなる。

< 解説 by Aguro >

パウル・ティリッヒについて、言及してみましよう。「1886 1965年、アメリカで活躍した神学者。ドイツのブランデンブルク州シュタルツェッデルの牧師の子として生れる。ベルリン、テュービンゲン、ハレなどの各大学で神学、哲学を学び、ブレスラウ大学より哲学博士を授与される。第1次世界大戦の時には、ドイツの従軍牧師となったが、終戦後はベルリン大学の私講師となり（1919年）、同時に宗教社会主義運動に関与して、その理論的指導者となった。その後、マールブルク（1924年）、ドレスデン（1924年）、ライプチヒ（1925年）、フランクフルト（1929年）の各大学教授を歴任する。しかし、ナチズムを公然と批判したため、ヒトラー政権によって教授職を追われ、ラインホルド・ニーバーらの助力でアメリカに渡り、ニューヨー

クのユニオン神学校に迎えられた（1933年）。以来定年までの22年間、同校で哲学的神学を担当、定年後はハーバード大学（1955-62年）、シカゴ大学の教授を務め（1962-65年）、宗教と文化の各方面で多大の影響を与えた。彼によれば、世界と人間の現実が抱える問題を明らかにするのが哲学である。これに対し、啓示の答を提供することが神学である。神は「存在の根底」であり、キリストは、疎外状態にある人間実存を回復させる「新しい存在」である。従って、信仰は人間の究極的関心であり、宗教は文化の根底をなすもので、神学は文化の諸領域と対話する必要がある。その著作は、『ティリッヒ著作集』（全10巻、別巻3）として刊行されている。」（聖書の達人より）

呼応の方法 "Method of Correlation" とは「世界と人間の現実が抱える問題を明らかにするのが哲学である。これに対し、啓示による答を提供することが神学である。」つまり、人間の歴史的事実から発生する諸問題と聖書的シンボルの中に含まれた真理とを「問と答」との関係において把握しようとしているのです。

私はティリッヒの神学については詳しく学んでいないのでよく分かりませんが、エリクソンはティリッヒの「問と答」との関係において把握しようとしている点から、「教理の今日的表現」の方向性を見出そうとしているようです。

[1999年8月10日 13時29分35秒]

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson
Part 1. The Doing of Theology
第一章 神についての学び：第一項目 神学の性質
第七節 教理の今日的表現
第二段落翻訳

たくさんのテーマは、私たちがメッセージの今日的表現を案出するとき、それら自身探求にとって実り多きものとして提示されるだろう。私たちの時代はますます非人格化と超越性によって性格づけられているように思われる。しかしそれぞれの人を知っておられ、それぞれの人を見守られる神の教理には、有益に関係付けることができる人生の個人的次元に対する必要があるとの示唆がある。そして現代のテクノロジーは世界の諸問題を解決できるという信念が存在している。しかし問題は理解されているよりもますます大きくなっており、より恐ろしいものとなっている。そして人間が彼ら自身にとって最も大きな問題であるとの理解が増大してきている。この背景に対して、神の力と摂理は新しい適切さを保有している。

< 解説 by Aguro >

ある人がおもしろいことを語っていました。「ある時代には火薬と羅針盤（航海術）と印刷術が時代を大きく変えました。しかし今世紀は原子爆と交通手段の発展とコンピューターがこの時代をおおきく変えました」と。

私もパソコンを使うようになってから、情報に関するテクノロジーの進歩には驚かされています。十年ほど前には、特定の軍事施設やきわめて限られた大学の研究機関にのみありました数十億円のコンピューターの機能が、いまや十数万円前後で私たちの手元にあるようになりました。そして瞬時に世界

のあらゆる情報にアクセスできるようになっています。しかし「現代のテクノロジーは世界の諸問題を解決できるという信念」があることを認めつつも、「人間が彼ら自身にとって最も大きな問題である」という指摘は大切だと思います。そして神学こそがこの根源的な問いに方向性を提示できるものと思います。

=====
[1999年8月12日 12時34分52秒]

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson
Part 1. The Doing of Theology
第一章 神についての学び：第一項目 神学の性質
第七節 教理の今日的表現
第三段落翻訳

今日、メッセージをコンテクスチュアライズ（文化脈化）することについて話すことはポピュラーなことである。この用語はしばしば、西欧諸文化から第三世界の諸文化に概念を翻訳すべき必要のある、宣教学の領域において使用されている。コンテクスチュアライズするプロセスには三つの次元があるように思われる。第一は長さと呼んでもよいかもしれない。これは、聖書時代から現在へメッセージを取り上げること、そしてそれを再表現することを意味している。

< 解説 by Aguro >

エリクソンは、「長さ、広さ、高さ」という三次元の用語を使用して、コンテクスチュアライズ（文化脈化）の必要性について言及しようとしています。長さにおいては時間的・時代的なことを意味し、広さにおいては地理的・文化的多様性を意味し、高さにおいては年齢的格差を意味させています。

「コンテクスチュアライズ（文化脈化）」については、「地の深みまで」すぐ書房、において詳細な小論文集が収録されています。その要約的なものとしては、ローザンヌ会議の継続会議のひとつであります「ウィローバンク会議レポート」があります。宣教学コア・カリキュラムにおいて、「宣教の聖書的基盤」「宣教の地理的・歴史的展開」「宣教と文化の関係」「宣教の戦略的構築」の三番目の主題において取り上げられるものでもあります。

[1999年8月13日 16時3分19秒]

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson
Part 1. The Doing of Theology
第一章 神についての学び：第一項目 神学の性質
第七節 教理の今日的表現
第四段落翻訳

私たちが広さと呼ぶ第二の次元、キリスト教は相違する文化において相違する表現形式を仮定されるかもしれない。西欧の宣教師たちは、彼らが単に彼ら自身の文化を世界の他の地域に伝達するだけではないということを確認していたに違いない。尖塔をもつ白い礼拝堂は東洋におけるキリスト教の礼拝のためにほとんど建てあげられてこなかった。教会の建築物は、この問題が起こってくる唯一の領域ではない。たとえば、私たちが種々の文化の哲学相違を見出さざるえないということは不可避である。文化的に最も重要な相違は、東洋と西洋よりむしろ、第三世界が驚異的に成長している南北の間に存在しているということが観察されてきた。私たちは文化的に関連する方法で、罪とか贖いのような概念を表現しうる能力を開発していかねばならない。というのは、それらはキリスト教のメッセージにとって本質であるからである。

< 解説 by Aguro >

「私たちは文化的に関連する方法で、罪とか贖いのような概念を表現しうる能力を開発していかねばならない。」との言及があります。私自身はコンテクスチュアライゼーションを「キリスト教のメッセージにとって本質」的な事柄の領域まで考慮したことはありませんでした。もっと派生的な、周辺の領域において、コンテクスチュアライゼーションを考えていました。この事柄は今後の課題かなと考えています。

この領域において、意欲的な日本語における論文としましては、私の友人の福田充男先生の「文脈化教会の形成」ハーベストタイム・ミニストリーズ出版の著作があります。その構成を下記に紹介しておきます。

第一部 序論

第一章 背景

第二章 世界観理論

第二部 日本人の世界観と宗教儀礼

第三章 日本人の超自然主義とその他の世界観テーマ

第四章 日本的超自然主義の特徴

第五章 日本宗教の儀礼

第三部 民族教会学を目指して

第六章 パウロの教会学

第七章 現代西洋教会学

第八章 民族教会学的前提

第九章 日本に適応した民族教会学

第四部 日本のための文脈化教会モデル

第十章 コミュニケーション方策

第十一章 決断過程における対決

第十二章 新しいキリスト教儀礼

第五部 結論

第十三章 要約と結論

ざっと読んだだけなので、適切な評価をすることはできませんが、かなり踏み込んだコンテクスチュアライゼーションについての意欲作であることは間違いのないと思います。その他、「ローザンヌ誓約」「ポスト・ローザンヌ」「ウィローバンク・レポート」「地の深みまで」などもコンテクスチュアライゼーションの原則論、議論のパースペクティブなどについての言及があり参考になります。

[1999年8月17日 12時7分7秒]

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson

Part 1. The Doing of Theology

第一章 神についての学び：第一項目 神学の性質

第七節 教理の今日的表現

第五段落翻訳

また高さの次元がある。ひとつのメッセージは複雑さと知的教養の相違したレベルにおいて表現されることができる。これは単純に会衆の年齢を意味するかもしれない。たとえば、人は大学の教授に対するように、子供に同じ形式でキリスト教のメッセージを伝達すべきではない。それを越えて、聖書的かつ神学的概念における背景の問題がある。しばしば学生たちは、また今度は彼らが真理の証しを伝達する対象である人々よりもさらに高度なレベルにあるプロフェッショナルな神学者の著作物を読むであろう。相違する時と場所、そして相違する聴衆に聖書の真理を表現する能力は、欠かすことはできない。

< 解説 by Aguro >

「ひとつのメッセージは複雑さと知的教養の相違したレベルにおいて表現されることができる。」神学書を読み、自らの神学的素養を豊かに養い続けることは、奉仕者が現場で生きていくために欠かすことのできない部分であると思います。しかしそれをそのまま聴衆に語ることはできません。学び養われた福音のエッセンスをよく噛み砕いて、例話や体験なども用いて、真理を分かりやすく伝達しなければなりません。

コンテクスチュアリゼーションの課題とは、「それは、それぞれの国のさまざまな文化の中で、教会は聖書のメッセージをどのように解釈し、どのように提示し、どのようにそれに従い、かつ生きようとしているのかという宣教上の中心的課題を、新しい自覚をもって掘り下げることである。これが最近の宣教論の中心的テーマのひとつであり、福音を私たちの生のコンテクストや私たちの文化的・社会的・歴史的状況に正しく翻訳し、真の意味で福音を血肉させるといふ課題」なのである。

宣教というものが「人」を媒介しているゆえに、コンテクスチュアリゼーションには次の五つの領域が考慮されます。1．伝道者という媒体のコンテクスチュアリゼーション、2．伝道と宣教のコンテクスチュアリゼーション、3．教会のコンテクスチュアリゼーション、4．日本における神学のコンテクスチュアリゼーション、5．信徒による福音の生活化というコンテクスチュアリゼーション。

[1999年8月17日 12時8分12秒]

記事タイトル: 第八節 解釈における中心的な主題の深化

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson
Part 1. The Doing of Theology
第一章 神についての学び：第一項目 神学の性質
第八節 解釈における中心的な主題の深化
第一段落翻訳

個々のクリスチャンにとって、彼らの神学の基本的中心的な特性描写を系統的に述べることは必ずしも必要なことではない。しかしながら、しばしばこれは助けとなることである。ときどきこの主題はその人の教派を反映する。たとえば、改革派の伝統のある人々は神の主権を強調する。しかしながらルター派のある人々は神の恵みと信仰の役割とを強調する。私たちが私たちの神学に特性を与えるやり方は、しばしば私たち自身的人格と背景に関係している。個人の希望にあわせてつくるやり方は、私たちが私たち自身の生活の中にそれを取り入れるときに、聖書の真理をより実用的なものとする。

< 解説 by Aguro >

「神学の基本的中心的な特性描写」は、「この主題はその人の教派を反映」し、「聖書の真理をより実用的なものとする」ということです。分かりやすく言いますと、スーパーマーケットで野菜や肉などの食材を購入してきます。これは聖書の歴史的・文法的解釈をした段階といえます。聖書個所の客観的意味の明確化です。それを解釈し、今日の私たちの生活に適用していく作業が続きます。それはいうなれば、購入してきた食材を料理することに似ています。それぞれの民に食文化があり、好みとする味があります。素材を大切に作る日本料理、油料理の多い中華料理、そしてフランス料理など洋風のものなど多彩です。同じ花でも生け花の流派も多彩、同じ剣でも同様です。聖書の「意味」において同じであっても、「解釈」と「適用」においては、多様性が許容されているのです。もちろん、本来の聖書の「意味」が許容している範囲においてですが。

教派における「基調語あるいは支配概念」についての理解では、ベルコフの意見が参考になると思います。私のA T A論文でまとめたものを少し引用してみますと、[H . ベルコフが言うように「支配概念」を「再生」という用語に規定した場合である。改革派の基調語の「再生」は、聖霊の働きの統一性と全体性を最もよく言い表している用語だと思われる。しかし、私たちはそれぞれの歴史的状況から離れて「真空状態」に生かされているのではない。私たちは、宇田師が指摘されているように、1. 神学的・教理的、2. 歴史的、3. 社会的・文化的な三つの要素をもつ実体なのである。私たちは、まず三つの要素を包含する「教派的状況」に根ざしつつ、それを止揚することによって、「共同性」を深化すべきなのである。H . ベルコフは、ルターにおいては「義認」が基調語となり、メソジストと敬虔主義においては「回心」とか「聖化」が基調語であった。カール・バルトは「召命」を主要概念とし、純福音やペンテコステのグループは「聖化」とか「聖霊の満たされる」という語を好む、と記している。]
(H . ベルコフ「聖霊の教理」松村克巳、藤本治祥共訳、日本基督教団出版局、1967、pp.106-107)

[1999年8月19日 8時35分33秒]

お名前: Mさん

> 質問 エリクソンというのは何ですか？ひとですか？

エリクソンとは、アメリカのスウェーデン・バプテスト系のバプテスト・ゼネラル・カンファランスの組織神学者です。現在アメリカの福音的な教派で最も人気のある神学者のひとりです。彼の組織神学書は、教派を越えて「基準的」な組織神学書として高く評価されています。将来、日本においても同様の評価を受けることになると思います。もう少し詳しい紹介は、私のホームページの中の「一宮基督教研究所」の中の「関西聖書学院講義録」の中の「組織神学」のページの下の方に記述してありますので、参考にしてください。

また、現在ミラード・J・エリクソンの伝記的な小論文ふたつを翻訳・解説したファイルを作成しつつありますので、おいおいそれも掲載していきたいと思っています。

>

>

> 質問 特性描写とはどういう意味ですか？

>

> この内容は、神学に特性を与えようとするとき、改革派の伝統のある人々は神の主
> を強調し、ルター派のある人々は神の恵みと信仰の役割とを強調するが、それはあ
> り問題ではない。そのやり方は、その人の人格と背景に関係しているので違ってあ
> りまえ。やり方はどうであれ、結果、聖書の真理がわかっていけばいい。というこ
> だと私は思ったのですが、ちがいますか？

>

そういうことです。特に「背景」という要素は、大きいと思います。これにつきまし私のホームページの中の「一宮基督教研究所」の中の「関西聖書学院講義録」の中の「福音主義神学研究」の中の「三つの要素」のファイルをご覧ください。もう少し詳しい説明が記述してあります。

[1999年8月20日 8時11分28秒]

記事タイトル: 第九節 主題における層形成

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson

Part 1. The Doing of Theology

第一章 神についての学び: 第二項目 神学の方法

第九節 主題における層形成

第一段落翻訳

何が神学における主要な論争点であり、何が副次的なポイント、副次的な論争点であるのかを私たちが決定することは重要なことである。ひとつの与えられたポイントが重要であればあるほど、その重要度は私たちがそれを主張する程度において保持されるべきである。従って、人は教会が大難難前あるいは後に世から取り去られるかどうかと同様、他の信仰者との交わりの状態に関しても同意を得ないかもしれない。しかしキリストが再臨されるかど

うかという問題に関しては一致があるに違いない。ある部分、これは単に私たちの神学の輪郭を作成する事柄である。その結果私たちは何が主要なポイントであり、何が副次的なポイントであるか、そしてどの主題が副次的ポイントに従属するのかを決定するのである。

< 解説 by Aguro >

「何が主要なポイントであり、何が副次的なポイントであるか」このような考え方は、神学をする者にとって大切であるばかりでなく、クリスチャンひとりひとりにとっても重要な要素です。

この点に関して、宇田進師の言及を紹介します。アメリカにおける教派相互間の競争のプロセスから「第一に、知らず知らずのうちに、自己を特色づけたり、絶対的なものとするところの特定の教理、主張に固執しようとする傾向が強くなった。具体的には、重要な相違点というよりは、むしろ二次的な事柄（たとえば、洗礼の様式、教会の政治形態、伝道事業の推進方法、千年王国をめぐる諸説、アスケナーゼ[禁欲]などの生活実践のあり方など）に見られる相違点が重視され、キリスト教全体が共有する伝統に対する意識と掘り下げがなざりにされた。第二に、お互いを正しく理解しあうということよりも、他のグループとの相違点を永続させることが、自分たちの目的であるかのように考える傾向をとるようになった。」

「...私たちは、外国から宗教移入を行う際には、まず付随する非本質的な社会的・文化的・歴史的諸要素を濾過し、次に福音の本質的な事柄を確かめ、さらに福音を私たちの生のコンテクストと私たちの歴史的状況に正しく翻訳する（コンテクスチュアリゼーション）という宣教上の課題と真面目に取り組む必要がある。」

ここに私たちがエリクソンの「組織神学」の学びを通して、目指しているところのもの、課題としているところのものひとつがあります。それは、私たちが自らのルーツやアイデンティティに忠実でありつつ、同時にそれをも冷静に観察し、「キリスト教全体が共有する伝統に対する意識と掘り下げ」、「福音の本質的な事柄の確認」において成長していくことです。私たちはみことばの「幹と枝葉（どちらも大切なものですが...）」を、神さまが啓示してくださっている度合いに応じて、みきわめることができるものにされていきたいと思えます。

[1999年8月20日 10時8分43秒]

"Introducing Christian Doctrine" by Millard J. Erickson

Part 1. The Doing of Theology

第一章 神についての学び：第二項目 神学の方法

第九節 主題における層形成

第二段落翻訳

しかしながらこれを話すとき、私たちはさらに主要諸教理の間にも濃淡の差異が存在することを認識する。たとえば聖書の教理は、すべての他の教理の理解がそこから引き出されるゆえに、根本的な教理である。さらに神の教理は、すべての他の神学的構成がなされるまさに骨組みを供給するゆえに基礎的な教理である。与えられた時の、特別な問題とか主題はそれが論難下にあったり、それが私たちが説教している世における特別な論じ方のゆえに、

より注意を要求する。疑いなく、神学的主題の相対的重要性についての注意深い考慮は、欠かすことはできない。

< 解説 by Aguro >

「主要諸教理の間にも濃淡の差異」「神学的主題の相対的重要性」という指摘があります。エリクソンの組織神学の特徴のひとつに、啓示論・神論・人間論・キリスト論・聖霊論・救済論・教会論・終末論の各論の序論において、いつも他の教理との関係を描写しています。その妙技は、三章からの各論の学びで明らかになっていくと思います。このテキストの1章、2章は、神学の方法論を扱った章ということができます。1章では「研究方法」を、そして2章では、「キリスト教のメッセージを今日化する」ことについて学びます。この事柄は、今日注目をあびている「コンテクスチュアリゼーション」のことで、明日から2章の学びに入ります。

[1999年8月23日 12時33分39秒]

お問合せ・ご注文は遠慮なく下記まで。

〒671-4135

兵庫県宍粟郡一宮町安黒332 : 安黒務

Tel & Fax. 0790-72-0235(昼), 63-0252(夜)

郵便振替:「一宮基督教研究所」01110-0-15025

aguro@mth.biglobe.ne.jp : <http://www.aguro.jp/>

「受けられた恵みに従って、自由なかたちで上記の郵便振替口座に支援献金していただけたら感謝です。」

[このページで「つながりにくいリンク」がありましたら、お知らせください。](#)

感想、質問、登録、注文、コピー・印刷、資料代金・支援献金窓口

気軽に[下記のアドレス](#)までメールをお寄せください。あなたのメールをお待ちしています。このホームページの資料をプリントアウト、そして再コピーされる場合は、それぞれ与えられた恵みに従って「IC!支援献金」をしていただけたら感謝です。

[安黒務](#) : 郵便振替口座番号 : 01110-0-15025 加入者名: 一宮基督教研究所
